

KABERBALA

Interview : **GOATS**
SILVER BACK
STONE EDGE

Article: **RAGING FURY , HYDRA**

超激辛武闘派宣言!
なんちゃって





祝復活！RAGING FURY

(独自の解釈とLOVE CALL！)

文責：多田SSM進

以前、KABBALAの1号で“頑張れCASBAH！”という、杉浦氏のCASBAHに対する熱い想いと激励の気持ちを書き綴った文章があったが、これはその企画を盗用し、SSMがRAGING FURYの祝・復活に対しての熱い想いを語ろうというものある。(コバンザメ編集者...多田進)

RAGING FURYはTHRASH系のバンドの中では、長い歴史と独自のスタイルを持った数少ない存在の一つである。その割には評価がマニア受けでとどまっているのが残念でならないのだ。別にUNITEDみたくメジャーデビューを果たしてくれ、とまでは言わないとしても、せめてKABBALA読者あたりにはもっと認識されてもいいと思うのだ。(まあ、俺以上に復活を喜んでいるマニアも数多くいるとは思うけど...)

RAVENの体中から溢れそうなハチ切れんばかりのエネルギーと、TANKにも通じる男の哀愁をミックスし、初期のMETALLICAあたりのキレの良さと重さで整えたかのような屈強なスタイルは正に“RAGING METAL”という名にふさわしいものである。現在のような混沌とした、低迷の状態が続くシーンの中でガンコなまでに自らのスタイルを守り続けるという姿勢は感動に値するものがある。RAVEN、RAGE、WARGASMあたりが好きな人は絶対に気に入ってもらえと思う。自らの信念をかたくなに守り続ける者連だけが持つ、時代に流されることのない熱きHM魂を感じさせてくれるバンドなのだ。

中川氏以外のメンバーは変わってしまったが、“RAGING METAL”は不滅である。最近リリースされた3曲入りのデモでも、それは見事に証明されている。新生RAGING FURYのスタートは快調であると言ってもいいだろう。

こうなったら、一日も早く現在のメンバーでLIVEを見せてほしいものだ。きっと観客を圧倒してねじ伏せるかのようにエネルギーをぶつける力強いLIVEを観せてくれるだろう。とにかくそれが一日も早く味わいたくて、体がウズウズして仕方がない。RAGING FURYのLIVEは力と力の勝負だと思う。彼等のLIVEに対して、俺は首の骨が折れまくるぐらいのHEAD BANGINGで応えたい。

もし、RAGING FURYに興味を持って音を聞いたことがない人がいたら、LIVEに行くなり、CDなどの音源を聴いて“RAGING METAL”というものを体験してみたい。

新生RAGING FURYの今後に期待したいし、応援したい。俺はそう思っている。

RAGING FURY DISCOGRAPHY

(基本的なモノ)

FURY度 = 1、 = 0.5

DEMO # 1 '86

彼等の記念すべき1stデモ。この頃は歌詞が日本語で、曲もストリートで垢抜けないPower Metalという印象が強い。この後で完全に開花する“らしさ”や“凄さ”は見え隠れする程度。だが、個人的には何か潔くって良い。俺は好きだな、うん。

DEMO # 2 '87 “WOLFSPIDER”

ここからが本当の意味での“RAGING METAL”のスタートを考えてもいいだろう。自らの根底にあるNWOBHMを骨組みとし、THRASHで肉付けしたかのようなスタイルはここから始まった。永遠のアンセムとも言える“Wolf Spider”(後の“Man Spider”)を収録。

EP'88 “THE RATTLESNAKE RULES”

A面の“Electric Brain”は彼等の全てを吹き込んだかのような曲で、疾走感、展開、構成のどれ一つとっても文句ナシの名曲。B面もメドレーみたいな形で2曲立て続けにくるが、ヘヴィかつスローな部分からスピーディーな部分へと雪崩込む辺りはカッコいい。日本のTHRASH史上、いや、世界のTHRASH史上に残る超名作。

STUDIO LIVE TAPE'90

タイトル通り、一発録りで録音されたというデモ。LIVEのノリを意識したかのような内容で、結構ラフに聞こえるけど、実はカチッとまとまっている。1、3曲目はCDにも収録されているが、個人的にはこのデモのテイクの方が好きだ。(特に“The Way Of Life”)

CD'92 “RAGING FURY”

彼等の初めてのCDフルアルバム。タイトルを変えた“Man Spider”や“The Way Of Life”などの代表曲と新曲が収録されている。アルバム全編通して“RAGING METAL”が詰まっているが、ギターの音が軽かったりと音質面での問題が多く、彼等の魅力が伝わりづらいのが残念。良い曲多いのにねえ...

DEMO'93 “IRON SKIES”

タイトル曲のみ収録のデモ。恐らく配布のみだったと思う。ヘヴィかつスローなテンポで突き進んでいく曲だが、その中に切り込んでくるギターソロは秀逸である。最近のMETALLICAのうねるようなノリにMANOWARのドラマ性をミックスさせたかのような劇的な曲で、全ての部分が計算され尽くしたかのような名曲である。

この他にオムニバスLP、CDに参加した音源も幾つか存在している。

左下：1stCD「RAGING FURY」

右上：1stDEMO「DEMO#1」

右下：DEMO「STUDIO LIVE TAPE '90」



DEMO'95

遂に復活した RAGING FURY の新しいデモ。中川氏以外のメンバーが変わった事もあってか、期待半分の不安半分の状態で聴いたが、期待の方が上回ったので安心といったところだ。曲を書く人間が変わったせい、曲調や方向性は以前の延長線上にあるにもかかわらず、全体的にストリートでアグレッシブな印象が強く感じられる。どこことなく NARCOTIC GREED みたいな1曲目なんかは新境地とも言えるナンバーであるものの、“らしさ”を強く感じさせるのは、中川氏の強力なヴォーカルが RAGING FURY である事を主張しているからであろう。昔の曲と比べると、楽曲のインパクトがチト弱くなったのは否めないが、それでも RAGING FURY 健在！というには十分過ぎる内容である。今後も方向性を変える事なく頑張っただけの事である。あとは LIVE が楽しみだ。
3 曲入り。¥500。

c/o RAGING FURY
〒662 兵庫県西宮市苦楽園二番町7-23
中川 春夫



DEMO '95

RAGING FURY HISTORY

1982年：SPELLBOUND の中川智嗣 (G/Vo) と石島博保 (Ds) が別プロジェクトという形で中川春夫 (B/Vo) を入れて京都にて結成。
1983年：活動の拠点を大阪に移すためにメンバーチェンジを行ないラインナップが中川春夫 (B/Vo)、山田豊三 (G)、絹田正人 (Ds) となる。以後大阪を中心にライブ活動を行なう。
1986年：オムニバス「GO TO EAT (METAL DOM)」に「Scream Murder」で参加する。
1986年：初のデモ「RAISING FURY」をリリース。収録曲は「Black Horce」「Do You Wanna Get Sticked?」「Fight It Out」。
1986年：オムニバステープ「AGGRESSIVE COMMANDER」に「Shooting War」を提供。
1987年：2nd デモ「WOLF SPIDER」をリリース。収録曲は「Wolf Spider」「Underground」「Donald Duck」「Barricade」。
1988年8月：初のシングルとなる「THE RATTLESNAKE RULES」をリリース。
1990年：ドラマーが絹田から東 (ex-VEXATION) にチェンジする。
1990年：「STUDIO LIVE TAPE '90」をリリースし、オムニバス CD「FAR EAST THRASH ARMY II」に参加する。
1992年：待望の1st フルレングス CD「RAGING FURY」をリリース。収録曲は「A Man Called Dragon」「The Trifids」「Never Say Die」など。
1993年8月：無料配布デモ「IRON SKIES」をリリース。
1993年12月：この月の大阪でのライブを最後に東、山田が脱退する。
1994年5月：ドラムに ex-NARCOTIC GREED の菊野が加入する。
1994年9月：恒例の March Of The Final Decade TOUR に参加。
1995年12月：新メンバーによる初の音源となる「DEMO '95」をリリースすると同時に、26日の大阪のライブで完全復活を果たす。

特別新春寄稿

今年はどうなる

文責：金田 興一郎

昨年末の住専の問題が蜂蝶(ちょうつがい)のようにバトンタッチされた96年は経済企画庁が言うほど景気は回復の兆しをしめさへんと思う。なにをしようむないこと言うとなんねん、おっさん。と言われると思うが、過去の不況の時でも様式にとらわれた音楽は衰退の道を歩み、感情的に受け入れられるパンクなどのストリートから自然発生される音、ノイズが社会環境に合致されていくことになる。当然今年もそういった意味ではストレスの溜まりそうな一年であって、オウム事件が世紀末の不安を一掃かとおもえば、なんかエンディングがすっきりしないままの一年になりそうやというわけで今年一年も、元気いっぱいブルータル。スラッシュ系、ハード・コア系、が軸となってその遠心力でインダストリアルやラッパー等のディティールと融合されてますます王道を形成されていくようになると思うし、ジャンルの拡散化はもっと多品種小ロットになっていくだろう。個人的には Hi-STANDARD の原始帰りの楽しさ、そして高校を卒業してもこのテンションを保ってほしいヌンチャクが楽しみ。昨年本誌ではあまり扱ってくれなかったがカーニバル・ピープルあたりのサウンドが王道を極めて欲しいわな。私事で恐縮だが、カーニバル・ピープルは去年聴いたなかで一番完成度の高い作品と思う。正直、ブルータル・スラッシュ系のバンド群はほんまに自分を見つめていかんとダンゴ状態から抜け出すことはできへんやろう。デス系と呼ばれるバンドも同様。歌詞の内容もいまではトレンドでなくなってきたんやから、欧米の先駆者たちがメロディアス系に突き進むか、より一層プログレ化が宗教音楽と融合するか、岐路に立たされていると思う。さて専門分野と誰が呼んだかビュア・メタル。本誌ではお馴染みの GUARDIAN'S NAIL 以外は現在の処ほとんど瀕死の重傷だ。その他は正直もう一度組織論から立て直せと言いたいところか。今年期待している新人バンドは元 SALEM のローディーだった東京の ZEAL CAMERA、そして現在 VIGILANTE にヘルプで加入している川崎のダブル・クラウド・トリオ、KEIJI やろな。特にこの2バンドは洋楽 HM ファンの一番嫌う Vo 面で合格点を取れると思う。希望的な願いは大阪の HYDRA の方向性安定に、VIGILANTE、STONE EDGE は早く人事を安定させて健康体で活動して欲しいし、当然、丹羽秀彰氏の今後の動向は目が離せない。CASBAH 等に人材を送った元 VANGUARD の OB からもデモがあがってきて非常に楽しみである。

ただ気になるのが、ほとんどのバンドが脱パワー・メタルをめざしてプログレスの方向に向かっていっとること。インテリジェンスになっていくのは一向に構わないのだが、もっと自分らの音に消化せんとあかん。受けたとか、売るとかは別問題。なんとも言う。それは結果であって最初からメジャーや客の動員を考えたらあかん。どうも営業戦術が先走りした去年やったが、今年は各バンドはルーツの見直しをやる時期にきたのでは。レコード大賞の t.r.f にしたって、70年代に流行ったモータウン系のサウンドすばりを日本語にアレンジして自分らの中に消化しとるし、ドリカムのメロディ・ラインは60年代に流行ったフィフス・ディメンションのアレンジを見事に現代の音に消化している。答えはここにある。ハード系の音を聴く奴。ライブハウスに行く奴。すでに世間からお宅扱いされている嗜好分野やからせめて好き勝手にやって欲しい。リストラは終わったんやから。名曲だけは後生に残る。



SILVER BACK

INTERVIEW

日時：3月14日（木）午前1時頃
話し手：田中 清久（SILVER BACK）

以前 # 4 で SILVER BACK を紹介した記事を書いたけど、どの位の読者がその事を知ってるのだろうか。それ以来札幌の情報はBassの村野正範氏に頼らせていただいていた。そんな彼らは去年の11月に久々に東京にやってきてくれた。彼らは札幌に戻った後、新作の制作に取りかかっていたのだが、3月に入りレコーディングが終了した最近になって何と村野正範氏が脱退したという事実が本人の口から告げられたのだった。そこで私は急遽予定を変更して SILVER BACK のブレインである田中清久氏にインタビューを試みた。田中さん有難うございました。（文責：すぎ）

色々と聞いてみたいことはあるんですが、初めてですので簡単な SILVER BACK の略歴からお願ひします。

田中（以下略）：結成して足掛9年になります SILVER BACK です。最初のメンバーは自分と今のヴォーカル（伊熊氏）と村野氏と、あともう一人今はいないドラマーなんですけど、4人で最初結成されて、数回のメンバーチェンジの後に、今回のアルバムを録るメンバーで結構長い時間いたんですけど、今回のアルバムで村野氏が抜けてしまい、違うベーシストが入る事になってしまったんで、厳密に言っておリジナルメンバーは2人しかいないという事になってしまいました。

新しいベーシストはもう既に決まっているという事なんです。
ええ、そうなんです。

個人的に村野氏が脱退してしまったという事に非常に驚いているんですけど、村野さんは SILVER BACK のオリジナルメンバーということで今までずっとやってきたわけですよね。ここで田中さんから村野さんの脱退理由について説明して貰えますか。

あの僕の受けた説明は、ヘヴィメタルになんか疲れたようなことを言っていたんですよ。彼も今丁度変化が欲しかった時期だったのかも知れないですけどね。そういう話を打ち明けられたもので、なんていうかこっちも強く引き留めるような事を言えなかったような感じなんですよ。

結成から足掛9年ということですからずっと活動してきたわけですけど、初期の頃から今のスタイルというのは変わらなかったんですか。
基本的には変わってないです。

歌詞は日本語から英語に変わったようですけど...

ええ、そうです。ずーっと昔、最初の頃は日本語でやりましたね。今でも、日本語にしたらしいんじゃないかな、っていう気も個人的にはするんですけど、バンドの方針なんで。なかなか思うようにいかないですけど。

じゃあ音楽性としては一貫したスタイルを貫いてきたと。そこがもしかしたらある意味での愚劣しさにつながってしまったのかもかもしれませんね（笑）

（笑）そうかもしれませんね。まあ、そうですね。最初の頃の曲をやっても、今の曲とダブらせてライブを構成してもそんなに変化ないですからね。

すんなり溶け込むと。

ええ、そういう感じなんですよ。

そんなこんなでバンド内部に大きな動きがあったわけですけど、ここで新しいベーシストを紹介してもらえますか。

えーと、太田由紀子さんというベーシストなんですけど、大昔に札幌でガストリン（???）という女性バンドを結成してまして、解散の後に NEGAROB0 を少し手伝っていて、それから UBI GUN に加入、脱退、それで色々なバンドを転々としたのちに今回の SILVER BACK 参加につながったわけです。女性のベーシストとしてはなかなかアグレッシブというか、そんなタイプのベーシストですね。

ああ、じゃあSILVER BACKに加入する前に既にUBI GUNの方は辞めていたんですか。

ええ、辞めていました。なかなか色んな所から「やってくれ」という声がかかっていたようなんですけど。…結構良いベースリストですよ。あの～、音は全然違いますがドスティーブ・ハリスが好きだという彼女なんですよ。

田中さん自身はNWOBHMから多大な影響を受けているということなんですけど、SILVER BACK全体としてはどういったバンドに影響を受けていると思いますか。

勿論NWOBHMに個人的に影響を受けてますし、それと…初期のMETALLICAですが、本っ当に初期のMETALLICAのあの頃持ってたガムシャラな感じ、ありますよね？整いきっていない激しさというか、そういう部分が含まれているような気がします。あのぉ（SILVER BACKは）緻密な感じのバンドじゃないです。結構粗い感じのバンドです。プレイは粗いんですけど、曲はちょっとちまちましてるかも知れませんが。

SILVER BACKの音楽性を一言で表現するなら「ヘヴィメタル」という事になると思いますが、所謂「パワーメタル」というのとは一線を画してますよね。

そうですね、どっちかって言ったらヘヴィメタルっていう感じだと思います。あまり個人的には細かいジャンル分けというのは好きではないんですけども、説明するときにはどうしてもそういうのを使ってしまいますよね。

SILVER BACKの音っていうのは、一貫した流れと言うか、ある種の何か「もの悲しさ」みたいなのが付きまとうと思うんですけど、その辺は意識した事ありますか。

いや、意識するまでもなく、内包している音楽だと思うんですよヘヴィメタル自体が。ロック自体がブルースから派生して出来たものですよ、歴史的に見て。それが純粋な形で色濃く残っているのがヘヴィメタルだと思うんですよ。だからそういうニュアンス、そういう何かもの悲しい感じっていうのが含まれていて当然だと思うんですよ。ヘヴィメタルのどの曲でもそうだと思うんですけど、ブルースコードのソロってありますよね、それが自然と合う曲が多いですよ。マイナーコードにしてもメジャーにしても。そういうのは全然意識するまでもなく出てくるものだと思います。

内面から滲み出してしまうと。

そうですね。意識したわけではないんですけどね。自然と出てしまうんですけどね。

それはSILVER BACKの歌詞についても言えると思うんですよ。歌詞はヴォーカルの伊熊さんが大半を書いているわけですが、音楽とマッチした部分があるというか…。

はい（苦笑）あまりネガティブな曲は意識して書かないように打ち合わせてはいるんです。ネガティブな曲って巷に多いですよ？だからなるべくそういうのを避けてなるべくポジティブに。パッと聴きには…パッと聴きっていうか、歌詞読んで貰ったら解ると思うんですけど、結構ドギツイ内容の歌詞でも、よく噛み砕いて解釈してみたら前向きな意味の詞ってというのが結構あると思います。

歌詞ということで言えば、POISON CHILD（＃9）のインタビュー読んでスゴイ興味を持った事なんですけど、あの…「ベルセルク」という漫画を題材とした歌詞を探り入れていると、あれで興味を持って漫画を読みたんですけど、何かいきさつみたいなものはあるんですか。

BEYOND THE THOUGHT

この世界には 人の運命を司る

何らかの超越的な「律」……

“神の手”が存在するのだろうか？

少なくとも 人は自らの意志さえ自由にはできない

人は記憶の彼方 遥か遠い日

心に負った小さな傷を庇うために剣を執る

人は思いの彼方 遥か遠い日

微笑みながら逝くために 剣を奮う

（ベルセルク% 巻「剣風」より）

いはいえ、あのぉ～個人的に好きなんです（笑）。今回もそういうニュアンスの曲が何曲もあります。

それで私が一番面白いと思ったのは、そのことに関連して作者の三浦建太郎さんにコンタクト取って了承を得ているという点なんですよ。

ハハハ、まさか返事が来るとは思ってたんでビックリしました。

“BEYOND THE THOUGHT”ではそのまま詞が使われてますよね。

あれは漫画の扉絵に書いてある詩のような物があったんですね。それを使わせていただいたという事なんです。

関係ないかも知れませんが（笑）CDを送って感想とか何かありましたか。

感想とかっていうのは、あのぉ～本人やっぱヘヴィメタルとか聴かなかったみたいなんで、とにかくそういうのが自分の作品に曲を作ってくれたという事でかなり喜んでくれたみたいです。特にこれといったアレは無かったですけど（笑）。

これも関係ないんですけど（笑）「ベルセルク」をCDドラマかOVAにするかもっていう話がありますよね。それで思ったんですけど、その作品のバックでSILVER BACKの曲が流れたら痛快じゃないかなって思ったんですよ。

痛快ですね。ええ、もの凄く痛快ですね（笑）。こればかりは「神のみぞ知る」ところでしょうけど。

でも「UNCULTIVATED LAND」に収録されている“WHITE”にしても“BLACK KNIGHT”にしても個人的には使えるんじゃないかと（笑）。

やぁ～メタルはどちらかというとアニメ向きの気もしますけどね。まあ曲にもよりますけど、ドラマチックという点で。何かそんな感じがしますね。

古いんですけどLIONの“TRANSFORMER”とか。

TESTAMENTも何か使われているらしいですね。何か「うろつき童子」でしたっけ？ちょっとエッチらしいアニメのビデオに使われているらしいですね。

まあそんなこんなのSILVER BACKですが（笑）今回2ndアルバムを制作中という事なんですけど、もうレコーディングの方は終了したんですよ。

なかなか骨の折れる作業でしたが、無事終わりました。

今回は新曲と過去の既発表が半々だと聞いているんですが。

ん～っとですね、そういう予定だったんですけども全部新曲になりました。新曲作っていくうちに「これも、これも」という事になりまして、前の曲が入る隙間が無くなってしまったと（笑）。

収録されるのは全部で何曲なんですか。

8曲です。あとオマケみたいなのも入れるかどうかは今検討中なんですけども。

11月18日のライブ（目黒ライブステーション）ではその内の3曲が演奏されましたが、聞いた印象としては前ノリのストレートな感じの曲調ですよ。

そうですね、そんな感じの曲が多いですね。

そうすると1stに比べてよりストレートで攻撃的というか、そんなサウンドになったと。

ええ、そうです。目黒のライブステーションでやった、今回のアルバムに入ってる曲でやった曲ですけども、まず1曲が“NEZ PERCE”という5分位の短い曲なんですけど、その曲は割と変わった三連の曲なんですけど、短い内の中でもなかなかドラマチックに仕上がっている曲だと思います。そして2曲目の“BACK IN THE LIGHTS”は、これはストレート中のストレートみたいな感じなんですよ。リフが変わっていて結構頭に残るんじゃないかという気がします。3曲目は“NATIVE”って言う曲なん



ベルセルク（ヤングアニマル：白泉社）

ですけど、これは第二次大戦の日本兵の事を歌った曲なんです。

テラッと曲紹介が出ましたので、ここで残りの5曲についてもお願いします。

えっと、まだアルバムの曲順とかは全然決めてないんですけど、とりあえず今ある曲だけ紹介しておきます。前で紹介した3曲の次は...4曲目に“Why Has He Got Burned With Revengeful Thought?”という長いタイトルの曲なんですけど、これも前作の“BLACK KNIGHT”や“WHITE”と同じ感覚で、まあモロに物語(ベルセルク)を詞にしたという感じです。10分位の長い曲で、かなり良い展開が出ていると思います。ミドルテンポの重い曲なんですけど、なかなか良い曲に仕上がったと思います。SILVER BACKで初めて合唱、というかコーラス、まともなコーラスというものを最後の所で大袈裟にやっています。結構面白いと思いますよ。その次が“SHAKE HAND”という速い曲ですね。SILVER BACKの曲はどの曲も展開が多いんですけど、この曲も激しく展開の変わる曲でなかなか面白いと思います。その次“NOTICE WITH A BERTH OF DEATH”。この曲はミドルテンポの淡々とした曲です。詩の内容は人間の実存について悩んでいる主人公がいるというそんな感じの曲ですね。この曲のメインリフもちょっと変わった感じのリフなんですけど、ギターソロが極端に長い曲です。目茶苦茶に弾いているギターソロなんで、ちょっと理解出来ない人もいるかも知れませんが、そういった感じのソロをやってみました。次は“IN ORDER TO LIVE”。この曲はストレートな曲です。ハッキリ言って今はやりの曲ではないですね。昔のIRON MAIDENパターンというか、そういう感じの曲ですね。堂々とこういう感じの曲をやっているバンドは少ないと思います。そして8曲目“FEMT”も“Why Has...”と同様に物語(ベルセルク)をモチーフにした曲です。この曲は短い曲が3曲くっついて長くなっただような曲で12分あります。

という事は組曲的な...

そういう感じですね。“FEMT”という曲の第一部が“CONFINEMENT”っていう部分で、ここは変わったタイプのリフでギターが結構面白いと思います。アップテンポのリフなんですけど。そして次は“FRIENDS”っていう部分で、これは綺麗なアルペジオからヘヴィなミディアムテンポに移っていく部分です。この“FRIENDS”っていう部分の歌の部分に女の人の声でナレー

ションが入ってるんですけど、そこはドラマティックに仕上がっていると思うんで是非聞いてみてください。その次が“GRIFFITH”という部分なんですけど、これで曲が完結すると。曲の感じが全然変わってしまうんですけど、ここで曲が完結するという感じの曲です。とりあえずこの8曲で構成されたアルバムが今年の7月位には出る予定なんですけど、その辺の時期を見て作業中なんです。

今聞いてますと、10分を超える大作が2曲あって、前作でも“BLACK KNIGHT”とか3rdデモでは“MENTAL DISORDER”とか、10分を超える長い曲が多いですよ。そういった部分を今のヘヴィメタルを批判する人達なんかは「古い」だなんだと言ったりするわけですが、そういった声もある中で敢えて10分を超える大作にチャレンジしようというのには理由があるんですか。

いや、個人的にはあんまり大作にはしたくないんですけど(笑)本当言うと。ただ、作っているうちに「その部分はこの部分の次に必要だ」というのがどうしても出てくるんですよ。「そんなの取っちゃえばいいじゃないか」という気がしないでもないんですけど...それじゃあ納得しないんですよ。

そこが拘りですね。

そうですね。だからなるべく曲はスリムにしたいんですけど、そういう経緯があります。

田中さんはギタリストなわけですが、古平さんなんかから「田中さんはクラシックギターの名手だ」という話なんか聞いてまして(笑)確かにそういった面は“BEYOND THE THOUGHT”なんかに出てますよね。今回のアルバムではどうですか。

ああ、かなり出てます。曲の中でも結構出てますね。曲を作る時にクラシックギターで作る曲が結構多いんですよ。クラシックギターから出たフレーズから派生した曲っていうんですか、そういうのが結構あるんで、そういうニュアンスを大事にしたい気がするんですよ。

そういった部分もSILVER BACKのオリジナリティに貢献していると思いますか。

ええ、自分もそう思います。そういうのが好きです。

あと思ったんですけど、シンコペーションって言うんですが、三連のテンポって言うのが多いですね。

多いんですよ(笑)。それ意識したわけではないんですけども、どうしてもそういう風になってしまうんですよ。個人的に考えると三拍子って「優しいメロディ」が乗り易いテンポだと思うんですよ。そういう意味でもクラシックギターで曲作っている上でそういうのが多く出てしまうのかな、とも思います。特にバラードとかでそういうのが多いですから、やっぱりそうなのかなという気がするんですよ。それで全然話し違うかも知れないですけど、個人的に音楽がある上で、音楽の基礎というか、そういうの内で3つあると思うんですよ。まず一つが「子守唄」、もう一つが「労働歌」、もう一つが「神に捧げる歌」。どの音楽をとってもこの3つのどれかを内包していると思うんですよ。「子守唄」にしても「労働歌」にしても「宗教歌」にしても、昔の曲だったらハッキリしてますけど、今の曲ってなかなか輪郭が掴みにくいというか、わがりにくいという感じもするんで、そういうのを色濃く出したいなという気はしてます。

そうするとロックなんていうのは「労働歌」の代表的な物だと言えと思うんですが、そういった中でも「子守唄」や「宗教歌」のような要素を内包した物を...

ええ、やっていきたいと。まあ個人的な意見だから色々反論はあるかも知れないんですけど、自分はそういう風に思っています。

例えばイメージとしてオルガンの音であるとか、そういった音から来るイメージもありますが、SILVER BACKはキーボードは全く使用しませんよね。

しません。そういった鍵盤楽器はないですね。なるべくベースとギター、ドラムとヴォーカルという4つの部分でなるべく全部を表現したいなっていう気はするんですけど。僕個人的にはサイドギターっていうんですか、ギター2本でどうしてもやらなきゃならないようなフレーズがありますよね? そういう部分をベースに頼んでしまうんですよ。だからSILVER BACKにおいてはベースはベース兼サイドギターみたいな感じの曲の部分っていうのが多いんですよ。

バンドによっては音源は音源、ライブはライブと割り切っているバンドもいるわけですが、そうではなくてトータルとして4ピースのSILVER BACKの音を築いていきたいと。

そうですね。今回のアルバムではコーラ



スはコーラス、アルバムはアルバムという感じがしないでもないですけど(笑)基本的には楽器のプレイはライブのときも変わらないという感じですよ。アルペジオとかでクラシックギターを使用している所もありますけど、そこは生ギターという事で理解して貰えば結構なんですけど。

ステージでアコースティックギターを使用するという事もあるんですか。

ええ、以前はありますね。最近はそのようなスタンスはとっていないですね、そういえば考えてみたら。そのうちクラシックギターだけで他にベースとドラム、ヴォーカルでそういうニュアンスの曲をやってみたい、作ってみたいっていう気はありますけど。まだ実現はしていないですけど、そういう予定はありません。

また、北海道という環境、東名阪といった情報過多地域から遠く離れているという環境からもSILVER BACKの音楽性は多大な寄与を受けていると思うのですがどう思いますか。

いや環境は多大に影響されていると思います。自分でもそれは実感しますよ。そして個人的にも曲を作る上で、どこからも影響を入れたくない方なんです、あまり(他のバンドの)曲は聴かないようにしています。でもそれが古臭さにつながっているのかもしれないですけどもね。

ちょっと話が前後しますが、アルバムのレコーディングには村野さんは参加しているわけですね。村野さんは既にアルバムの制作に入る前から脱退の意思を持っていたようなんですが、そうした場合は、新しいバンド形態で音源の制作に取りかかるといことも選択できたと思うんですが、その辺はどう考えていますか。



あのですね、本人から打ち明けられたのが録り終わってからなんです(笑)。だから、どうしようもなかったっていうか、そういう事を考える事は全然なかったんですけど。...でも村野さんはオリジナルメンバーですからね。今回のアルバムは全然、村野さんでやってもらううちう事で違和感もなかったです。

そうだったんですか。まあ知らないものは考えようがないですね(笑)。

そうですね(笑)そうなんです。録り終わった次の日に「いやあ辞めたいんだ」という電話がきたんで、一瞬何言ってるんだかよく解なかったんです

すけど(笑)。でも彼も考え抜いた末の事だと思いますんで。

そういう意味では円満離脱と言えますかね。

円満離脱みたいな感じですね。まあかなり本人の意思も堅かったみたいですからね。あやふやな気持ちで辞めるっていったアレではないですから。もう9年ちょっと一緒にやってきた仲ですからね。やっぱり淋しいは淋しいですけど、でも、自分の気持ちに素直になったという点で「今までご苦労さんでした」とい感じも強いですね、ええ。

そういったわけで2ndアルバムのレコーディングも終了したわけですが、今後SILVER BACKはどういった活動をしてきたいですか。

これからリリースするまでは、CDの色々な作業がまだ残ってますんでそれをやって、あとメンバーでベースが変わってしまったんで、今までの曲とか、なかなかベースラインも凝ってますから、コピーするのもやっぱり難しいらしくて、時間がかかると思うんで、しばらく時間かけてじっくり練習を積んで、そして年内くらいに東京・大阪・名古屋いろいろ回ってみたいですね。

発売記念ツアーみたいな。

ええそうです。アルバム一杯持ってそっちに行きたいです。

前回(1stアルバム)は思うように出来なかったですからね。

そうなんです。前回は心残りのあるライブだったんで。そう意味も兼ねてまた行きたいですね。やっぱり東京・大阪・名古屋どこもそうですけど、やっぱり北海道と違って「見る視線が熱い」というかそういう感じがするんで、やってても「北海道と違うな」という感じがします。

そうですねえ～！(笑)

いや北海道は観客の反応が物凄いいシビアというか、そういう感じしますからね。「お葬式」のような(笑)。まあうちの曲はノリにくい感じがしますからね、だからどこいってもノッてはくれないですけど。まあそれでも本人は楽しんでやってます。

そういった活動を通して、最終的にSILVER BACKをどういった形にもっていきたいですか。スタンスにしても活動にしても。

やっぱりこういうジャンル、ヘヴィメタルというのは地道にやっていくしかないと思うんで、資本が続く限り本州の方とかにライブに行って、アルバムをコンスタントに出すという形でいきたいと思います。

でもシーンは今とても厳しい状態ですね。

あ、でも全然気にはしてないですよ。そういう「シーンの厳しさ」をまともに受けてたらバンドやっていけないんで(笑)。やっぱり好きなものをやってますから、だからそんな「苦」にはなってないですね。観客少ないのはもうしょうがないという事で、とりあえず自分達の好きな曲、好きな音を出してればいいという形で、そういう気持ちでやってます。

それでは最後になりますが、このインタビューを読んでもくれた読者に一言お願いします。

SILVER BACKはなかなか他に似たようなバンドがないと思うので、まあ好き嫌いはあると思いますが、ハマっていただければ存分にハマっていただけるバンドだと思いますので、本当にヘヴィメタルなんですけども、そういうのが好きでない人も好きな人も是非聴いてみて欲しいと思います。

今日はどうも有難うございました。



最後に後記の代わりにインタビュー後に送られてきた手紙の一部を紹介させていただきます。

「(前略)...インタビューというのなかなか難しいものですね。云いたい事の半分位しか云えなかった様な気がします。印象に残ったのが攻めのスタンスという言葉ですね。後からつらつら考えてみますと、まあ方法論ではあるのですが、独自のサウンドを貫く事が自分達にとっての攻めのスタンスなのかもしれません。メタルが弱くなったのは、新しいものを作らず、辺りと同じ様な曲をたくさんやり過ぎたからではないかと思うのです。まあ自分でも人の事は云えないのですが、サウンドの独自性、個性、といったものを強調するバンドが多く出現すれば、状況は上を向くと思うのですが、とりあえずは、SILVER BACKはヘヴィメタルが一番かっこ良かった80年代初頭の雰囲気を実にしたいと思っています。それはその頃のような曲を演ると云うのではなく、その頃の音楽から感じ取れた感動みたいなものを再現すると云う事なんです。...(後略)」同時に新ベースの太田由紀子の写真も送ってくれましたので紹介します。右側が太田嬢だそうですが、左の女性は誰なのでしょう(笑)

c/o SILVER BACK / 田中 清久
〒003 札幌市白石区栄通121-18-5 峰谷M-205

CHECK THIS BANDS

ここは「将来いつかは大化けするぞ!」と思われる幾つかのバンドを紹介してみようかというコーナーです。とは言うものの、KABALAが勝手に思っているだけでその保証なる物は全く出来ませんが、いずれも高いクオリティを持ち合わせていることは確かでしょう。もしかしたら読者の多くは既知のことかも知れませんが、「まだ聴いたことが無い」という人がいましたら是非彼らに触れてみて欲しいと思います。(文責: すぎ)

HYDRA

member:

VOCAL / 玉井 純夫

GITAR / 山田 彰彦

BASS / 大崎 利弘

DRUMS / 角谷 考宣

history:

- 91年8月 大崎と山田が、HYDRAを結成する。
- 92年4月 大阪ヤンタ鹿鳴館にて、ライブ活動を開始する。
- 93年4月 目黒ライブステーション、神楽坂エクスポージョンにて初の東京ライブを行う。
- 93年8月 ドラムに角谷考宣が加入する。
- 95年1月 ヴォーカルに玉井純夫が加入する。
- 95年8月 現在のラインナップで、難波ロケッツにて活動を開始する。
- 95年9月 3rdデモとなる「HYDRA III」のレコーディングを行う。
- 95年10月 目黒ライブステーション、名古屋ミュージックファームにてライブを行う。

今までに出した音源:

HYDRA (絶版につき入手不可)

HYDRA II (絶版につき入手不可)

HYDRA III (販売中 ¥700)

HYDRA IIIは下記で販売中です。

東京... 池袋BRONZE AGE、目黒THIRD STAGE、新宿DISK HEAVEN、DISK UNION各店

名古屋... DISK HEAVEN

大阪... DISK HEAVEN

主たる活動拠点:

難波ロケッツ (大阪は月1回のペースで)

目黒ライブステーション (東京は2ヶ月に1回のペースで)

自己アピール:

HMを軸に色々な音楽の要素をとり入れてゆく。曲形態によってはHMにさえこだわらない。自分達がCOOLだと思う音楽をやっていきたいし、自分達の聴いてみたい音楽を演る。新鮮な驚きを聴衆に与えたいと考えている。期待してもらいたい。あらゆる手法を駆使し、HYDRAの音世界を拡大してゆくつもりである。

連絡先: HYDRA OFFICE

〒558 大阪市住吉区万代東 1-2-23-23

Tel&Fax 06-691-7463

HYDRAを一言で表現するなら、プログレッシブな色の濃いテクニカルなヘヴィメタルという事になるのだろうか。卓越した各人の技術(特にベースは超人的だ)は、「職人」と呼ぶにふさわしいものがある。読者にはデモを聴くだけでなく是非ライブにも足を運んで欲しいと思う。

私が最近ハマってる一冊

「アメリカン・ロック集成

～プログレッシブ・ロック編～」

マーキームーン社 ¥3600

(文責: 多田SSM進)

先に書いておくが、俺は毎回マーキーを買う程の愛読者ではないし、プログレもちょっとかじってる程度に過ぎない人間である。

プログレっていうと、何かマニアックで難しい音楽だと思う事ってないですか? 個人的にはプログレ程不定型なジャンルはないと思う。様々なジャンルと密接し、国ごとに分類され、何を基準として枠組みされてるのかハッキリしないジャンルである。ズブの素人からすると、これは未知の領域である。少しずつ興味を持ち始めると、気になるものというのが徐々に増えてくるものである。そこで、ガイドブックとなるものが必要になってくるわけである。(長え前ふり...)

このマーキームーン社より発行されているロック集成シリーズは幾つか出ているが、それはそのアメリカ編である(今までにブリティッシュ、イタリア、フランス、ドイツと出ているハズ)。カナダもまとめてある。

何故、この本が良かったのか?

まずはHMファンの視点から見て、非常に接点が多いバンドがかなり掲載されている点である。RUSHやQUEENSRYCH、VOIVOD等のような読者に馴染みのあるバンドから、70年代のハードプログレ、最近のマグナカルタ・レーベル(SHADOW GARRALEY etc.)までしっかり押さえてあるだけではなく、それ以上にマニアックなバンドも押さえてあるので、かなり勉強になるし、資料としても一級品である。

それだけにとどまらず、あくまでプログレの流れを持つものをくまなくフォローしているので、サイケやアヴァンギャルド、フォークやトラッドまでしっかりと掲載されているので非常に濃い。何せ、JOHN ZORNやSONIC YOUTHなんかもしっかり載ってる訳だから、結構興味深いものがある。とにかく、音楽層の厚いアメリカの音楽の普段あまり出てこない部分を重点に置き、徹底的に追及している中味の濃さと深さには、ただただ頭が下がる。こんなに凄い本を出してくれたマーキームーン社に俺は感謝したい。

本の広告にも書いてあったが、初心者からマニアまで対応できるという言葉に嘘はない。¥3600と決して安い値段ではないので、買えとそう簡単に薦められるものではないが、立ち読みして面白いと思ったら、自分の財布と相談の上購入して欲しい。その価値は十分にあるハズ。



2月17日吉祥寺クレッシェンドにて

GOATS

INTERVIEW

日時：12月17日午後10時頃
場所：川口モンスター内

まずは初めてのインタビューですのでバンドの略歴から教えてくださいいただけますか。

野口（以下野）：結成は高校を卒業してからやね。

小坂（以下小）：90年？

野：卒業してから速攻やろ。

林（以下も林）：4年半前。91年？いや90年や。5月か6月？ちゃうわ、3月にDEATH TRAINゆうバンドで（爆笑）初めてこの4人でやって。

野：誰かのコピーやわ。

林：コピーから初めて...ほんでいつ名前変えたんやっけ？

野：1年くらいかなあ。

林：いや、そんなにならへんて。10月位やわ。半年後位にGOATSになった。

野：えっ！何でやねん。...

（ここでいつから「GOATS」になったかでもめる。）

林：...ちゃうか！あれは。...じゃあ8月にしとこ。8月にGOATSになりました。

（古平氏が後ろから小声で「GOATS仲間割れ」）

林：うるさいなあ（笑）で、メンバー変わらずでやります。

DEATH TRAINですか。

林：（笑）DEATH TRAIN。

死の列車...

林：それはGROUND ZEROの曲で「Death Train」ゆうのがあって、それが気に入ってバンド名にしたと。

GOATSっていうバンド名はどっからきたんですか。

野：それはまずい（笑）。

林：それは記事には出来へん。活字には出来へん。

小：一応「山羊」っていう意味だけ。

野：その「山羊」がどういう風に...

林：いや、それはウウー！よう言われへん（笑）。

小：色々あって「山羊」にきて、英語に変えたと。

林：最初は「Goats」ゆう曲が出来て、「ああ、ほならGOATSにしか」って。

じゃあ1stデモに入ってる「Goats」を...

林：ああ、あれは編曲してあれになって、その前にまたちゃう「Goats」ゆうのがあって。

それは歌詞も違うんですか？

林：いや、歌詞は一緒。

じゃあその歌詞を見れば大体わかるわけですね。

林：（笑）そうやなあ。やばいなあ。

小：訳せば。

野：出だしとか。

林：ちょっとだけひねった（笑）。うん、でもかなりマニアックな内容やな。パーソナルな。

じゃあちょっと順番が前後しますがメンバーの自己紹介をお願いします。

小：リーダーって言うてええの？

野：言いたいんやろ。こういう時だけ。

小：（笑）リーダーの、リードギターの小坂です。

林：血液型は？

小：え？ゆ、言う？（笑）

林：生年月日とあと好きな男のタイプ。

小：ハハハ...

林：なんやもう終わりかい。え〜っと、ベース、ヴォーカルの林です。

野：sonだけでええのん？

林：血液型はB型やけど。

野：リズムギターの野口です。か、彼女が欲しいなあ。

鶴田（以下鶴）：ドラムの鶴田です。

メンバーチェンジはないんですね。

小：メンバーチェンジはないです。

元々高校が一緒とかだったんですか。

林：小坂とわしと鶴キンが高校が一緒で、ギター同士が中学が同級生で。

滋賀っていうとシーンっていうのは無いんですね。

林：ないですわ。最っ低やもんね、最悪やねん。

じゃあ地元滋賀でライブっていうのは...

林：最初の頃はやってたんよな。やる所は一応ないことはないねんけど、まあシーンがない。

他にメタルバンドってあるんですか。

野：もうわからんなあ今は。

林：昔はFOBIA言うバンドが滋賀県出身やったな。あとは...知らんなあ。

そうすると必然的に大阪や名古屋に出ていくと。

林：そうやなあ。

小：最初は京都だったな。

林：京都は大した事なかったなあ。

野：京都は長かったもんなあ、やれたのが（ライブでの演奏時間が？）。

林：最初は京都で1年位やったよなあ。それから大阪出た。

GOATSの前のDEATH TRAINの頃って今の音と比べてどうだったんですか。近かったんですか。

林：今の音って言われたら全然ちゃうな。

小：違う。もっとゴリゴリな...ようわかってへんかったしな。

野：今でもわかってへんけどな。自分の作りたい音が出えへんし。

自分達の作りたいっていうか、自分達の求めてる音ってどういふのですか。

小：CDのあの音ではないなあ。

野：いやあ全く違う。

林：音言うのは曲って意味の音？

小：曲はまあ良いかな。

林：いうてもその都度その都度でやっぱりやりたいのが全然違うし、ただ単に誰かが作ってきて「ああええなあ」思うたらそれでええし。別になあ、決まった概念ゆうのは全然



ないし。

GOATSはよくデスラッシュだと色々言われますけど、自分達としてはGOATSの音はどの辺の位置にいますか。

野：わからんあ。

林：難しいなあ...スラッシュではないような、デスでもないし。

野：まあ GOATSの音やな。そう言わんとわからんな、どう説明したらいいのか。

林：スラッシュ的でありデス的でありポップ的であり...

小：ポップ的ではないなあ(笑)。

野：キャッチーな。

林：キャッチーな。まあ言うたら“Hello Again”(by My Little Lover)。ミスチル。

野：そうやな、そういう感じええやん。求めてるなあ。

小：多分カットやね。(笑)

でもそういうデスでもスラッシュでもないのがGOATSだと思うんですけどね。

林：ああ、有り難うございます。(後ろから太一氏が「モダンスラッシュじゃないのぉ?」と茶々が入る)え?ああ、しもたなあ、意外な所から(ツッコミが)きたなあ。

どこから来たんですかね。

林：あれは勝手に。

野：ある日チラシを見たらそういうセールスコピーが。

自分達ではモダンスラッシュだと思いますか。

林：モダンではないな。ちょっと違うな。

モダンっていうのとは違うんですけど、GOATSの音ってある種のアヴァンギャルドさっていうか、何が「ひねた」部分ってあるじゃないですか。その辺もGOATSの特徴の一つだと思うんですけど、それは意識してますか。

林：そやね、他と一緒に嫌らしいのが第一やな。差をつけたい言うか。

小：違いを。

林：違いを前面に出したい言うのがあるし。まあそれが自分等の好む音でもあるし。結局こういう音になって、とりあえず変化があれば、他とね。

話は変わってCDについてなんですが、CDが出るようになったきっかけって言うのは。

林：それは去年の12月に名古屋でライブやった時に社長が寄ってきて「CD 出さへんか」と。「ほな出します」って。「有り難うございます」と、それで決まったわけですわ。

その辺はバンド内でもすんなり決まったんですか。

林：ええ。「出してくれい!」言うて。

出せるんだったら出したいと。それでCDが出来て、さっきもチラッと出ましたけど、CDの出来に関してはどうですか。

野：...嫌やなあ。

林：とりあえず出来た音が思ってた音と違うのは確かやねん。

どの辺が違いましたか。

野：音質的にもそうやなあ。

小：音質とかバランスとか。ドラムの、バスドラの感じとか。

林：音質面って言うたらドラムが第一ちょっとアレやね。もうちょっとタイトに、タイト言うか、もうちょっと堅くしたかった。それがちょっと...わからなかったんがなあ、初めてやったから。聴いた感じがベタベタ~言う感じなんやけど、ほんまはもっと堅くしたかったんやけど~「はい、O.K.」なんて...作ってるうちには色んな事気付かんまま作ってしもて。出来上がって



HAYASHI

GOATS

When I got up,
I found my son stand up by me
He said "Get up, get up"
I don't know who he was so bit him
and suck him
He said "Fuck me off, fuck me off"
Panted soon, Rising blood, Reach the top
Launch white

When I worked,
I found my son stand up by me
Slapped him, Lay down, Rose up
I was beaten out so dash to the box
so fast, so fast
Take off, beat off, beat off
Panted soon, Rising blood, Reach the top
Launch white

Why couldn't I bear the impulse,
though I cross my heart over again

When I was sleepy,
I found my son sleepin' by me
I think nice guy, nice guy
I work him up,
he's willing to agree the master
Tired, tired then
Panted soon, Rising blood, Reach the top
Launch white

He takes me to there, He makes me a doll
He steals my mind, All are GOATS



TURUKIN

からしばらく聴いてみて段々「ああ~あそこはあししたらよかったなあ」って。

選曲に関してはどうなんですか。

小：選曲言うてもなあ(笑)。

林：あんまし持ち曲無かったからなあ。で、なるべく新しい曲めて。新曲2曲昔の9曲。

野：デモテープに入っていない曲言うたらバランスええな。

林：半々位やな。

1stデモからは3曲ですが、収録されてますけど、入っていない曲っていうのは「もうやりたくない」って感じなんですか、それとも次に入れようとか。

野：それはないなあ。

林：それはやらないでしょ。

小：そんな時は良いと思ってたっていう。

野：まあ聴くだけやったらええけどな。

小：ええ思いでかな。

野：思い出かい! (笑)(また後ろから太一氏「BRUTAL!」)

林：いや、それはまだ言われへんな。そやなあ...(古平氏「聞いている?」)うるさいなあ!もう(笑)

その言えはロゴが変わりましたよね。前のロゴはある意味で変といえば変だったんですけど(笑)でも変さが他とは違って...よくメタルとかだとギザギザとかグワァってやっちゃうじゃないですか、それが丸っこくてボワァとしててそれが個性的で好きだったんですけど、その辺はどう思いますか。

野：(某ツアー)Tシャツにのったあれが物凄もっさかったやん、俺等のが。何やわからへんねんあ。何か髭の...

林：ハクション大魔王よう言われてて(笑)。でもあれは前の奴は何ちゅうかああいう感じやったんやけどなあ。

小：CD用にロゴをカチっとしただけで。

野：後ろの奴とかは結構おもしろいけどなあ。CDの裏にも入ってるんですよ、違うロゴが。

(CDを取り出して裏を見ると)ああ、これですか。

野：ようわからんけどな。

林：それはまあ。

野：ちょっとちやらけるかなあと。

小：気付いてない人は...

林：要チェック!

はぁ...へ、変ですね。(一同大笑)個人的にどっちが気に入ってるとがありますか。

林：別に、どっちも好きやけど。みんなはどうか知らんけど。

小：また変えていくんちゃうか。

林：多分どんどん変わってくと思うけど。

小：もうこれ飽きたわ。

林：そやなあ。

あんまりそういう所には拘らない。

林：いやあ~全然拘んない。わしらだからステッカーも何もあらへん。Tシャツも無いし、ピラも作らへんし(笑)。それじゃやる気ないんかい!って、やる気はあんなんけど。

CDが出たことによってリアクションっていうか、ライブの反応とか変わりましたか?

林：リアクションは変わらへんあ。...そんなライブやってへんもんあ(CDを)出してから。そんな反応が変わる程は。

野：全く変わってないやろ?

小：前のまんま。まあ要するに意味無かったと(笑)。

後々ブレイクするわ。

林：ええ思いでやな（笑）

野：無茶苦茶な話しになっとるな（笑）

林：思い出話。

野：ほんまやる気のない奴等になっとるわい。

それを思い出にしないように（笑）

林：それ（CD）をババになった時に子供に自慢できるだけの話かな（笑）

野：まあ最初は君やろう。

林：えっわかか？

最近 GOATS のライブを見てなかったんですけど、髪の毛切りましたね。

林：かなり前やな。

野：そやね。...なんで？

林：いやあ何でやる...やっぱ第一にもてたいからやろ（笑）

野：それはあるやろなあ。

林：みんな女の子に「キーカー」言われたい。（笑）いや、正直な話別にそんな意味無いんけど、まあ切りたかったゆうだけで。まあ気分転換ゆう所ですわ。

野：いやあほんま林切ったらあかんわあ、マジで。小坂だけやったらまだええのやけ、ライブで見た目かなり「落ちた」なあ、迫力とか。落ちまくりもええとこや。だから3人長い時が...

小：フルパワーやった。

野：強烈やったもんな。

小：風来てた（笑）

林：みんな扇風機状態やった。前3人。YANTA（大阪）辺りでやった時が一番凄いなあ。

野：まだ若かったけど。

林：そやなあ、まだ19、20才位やった。その頃が...青春時代（笑）

野：...何でそっちの方面へ持ってこうとすんのや、君は！

林：ええ思いでかなあって。

今は落ち着いちゃったと。

林：いいや落ち着いてへんよ。

小：これからまだ...扇風機。

林：ほな伸ばすんかい。

野：ほなら次俺が切る番やな。

鶴：聖（さとる）はどうなの？

林：わしは伸ばすで。

野：その方が絶対ええわ。

林：中途半端に（笑）

野：中途半端に伸ばすんかい！

（髪の毛の話から顎髭の話になって中略）

林：顎に枝毛や。

小：インタビューこんなん？（笑）

林：顎に枝毛かあ。

小：違う違う。

野：関係ない話ばかりやな！

小：は、バンドの事...

林：見出し「顎に枝毛」。（笑）...またいい思い出。

CDの反応はまだ見えてきていないようですが、ここで今後の予定について、今後はどういう活動をしていきたいですか。

林：んーとりあえず活動ゆうたらライブしかないし、ライブをもっと積極的に色んな場所でより多くの人に...そしていい思い出に。

小：海外行きたいな、海外。1回やってみないかって。

林：金無いし。（後ろから太一氏「そういう話はないのかあ。あれ？噂だけ？」）...噂。多分噂（笑）

その噂いきましようか（笑）



NOGUCHI



ハクション大魔王



カチッとしたやつ



ちゃらけたやつ



KOSAKA

林：噂はあくまで噂やし...

小：どの程度まで説明しとけばええの？

林：いやあうちらもよう知らん。噂の方が進んどん。

小：海外デビューっていうのは嘘！嘘の噂。

林：ええ思いでやったな...

野：あっても思い出になってるん？！（笑）もう思い出かい！

林：その話はまあ...ちゃんと決まってから。

小：3月4月位。

野：まだわからんしな。はっきりした事とか全然わかってないし。

林：B.T.のバンドのEPに参加出来るかも、かも。

小：バクチクかもしれへんし、何かかもしれん。

それはどういうルートで？

林：滋賀県でS.O.Bが練習してる時にたまたまローディーの人がわしらの知り合いで、「ケビンとかいるし、来うへんか」っていうんで行って、CDとか渡してしゃべって。その時はそのまま終わって、で次の次の日がわしら大阪でライブやったから、ほなたまたま前の日がS.O.Bの追悼ライブで、次の日がOFFでアメ村（大阪・アメリカ村）の辺りをケビンとその社長が歩いて、それをたまたまわしらが見かけてしゃべって、「今日わしらライブだから来うへんか」言うたら来て、ほんでまあ気に入ってくれたんやけど。

小：それが上手い事いくかもしれへんし、っていう位やね。...2ndアルバムは？

林：え？知らん。

小：「どうや〜」って中橋さんが。

林：そんなんまだまだや。

小：曲が溜まったら。

林：まだいらんわ。こないだ録ったとこや。とりあえず1枚目が浸透してからやろ、ある程度。1000枚刷ったし。

皆さんの中でGOATSっていうバンドの存在は、生活の中でどういう位置を占めていますか。

林：難しいなあ...

小：俺は結構メイン。みんなはちゃやうやろけど。

野：何やそれは！

林：わしもメインやで。

野：俺もメインや。

林：当たり前や。

野：バリバリやん。

小：練習参加率が...（笑）

野：久々に弾いて腕が痛あなった（笑）

林：それは言われへんか（笑）いや、GOATS命やで。

小：ここ（指先）痛うなってるんねん、練習終わった後で「あ痛たあ〜」って（笑）

野：「何で痛いんや」って「久しぶりに弾いたし」とかな。

林：（笑）痛うなるやろ？（と古平氏に振ると「うん、皮めっちゃペロペロに剥ける」）水脹れになるやろ？（古平氏「なるなるなる」）

野：うっそやん。（太一氏も「皮がペリペリ剥がれてくる」）

林：結構これちょっと弾かんかったら皮薄うなってるで。

野：一週間位で？（古平氏「いやそんなでもないけど」）

林：2日位で柔らこうなってるで。

小：嘘や（笑）

GOATSは練習してないと（笑）

野：いやしてる。

小：みんなは結構真剣に。

野：真剣も良いとこよ。

小：個人では真剣。

林：わしは1日ペース無くしては寝れないゆう感じ。

鶴:(大受け)よう言うわ。
林:弦は変えんけどベースは好き。
野:練習嫌いやもんなあうちら。
林:でもまあ、まあ何があっても第一は第一やけどな。気持ちの中では100%や。
野:でも練習とかって昔の方がやってたよなあ。
林:毎日やもん。
鶴:あの頃は尋常じゃないやろ。毎日やってた。
野:そう。もう家帰ったら弾いて。
林:集合して。あっノグは予備校時代か。
野:その前によくやっとなんや、家で。ドラムを小坂の家に録りに行って、でギターを2本被せてベース被せてヴォーカル入れて、俺一人でやってたんや。...あれカッコ良かったなあ。
林:(笑) 嘘やあ。
小:METALLICAのコピーを一人で、各パート全部入れて。
野:ドラムが凄いいねなあ(笑)
小:ツーバスや(笑)
林:そんな個人的な話はどうでもええねん(笑)。どれ位GOATSに思入れがあるかや。
小:みんな強いよなあ。
野:みんな一番は一番やなあ。
林:鶴キンもしやべっておいた方がええんちゃう?
鶴:GOATSなあ...長いなあ。
林:確かに長いなあ、4年半や。
野:鶴キンの場合は、最初METALLICAのコピーやって、んで抜けるとか言ってたんだよな。
小:スラッシュは嫌いとか言うて。
野:んで何や、知らんうちに。(笑)
鶴:俺今でも激しいの嫌やもん(笑)。まあどっちかって言うと、Jポップっちゅうんかな、そういうのに...。
野:叩くのもか! 聴くのやろ!
鶴:叩くのも...(笑)
林:Jポップかい!
小:...たまにはええかな。
鶴:まあGOATSはサブかな。メインはJポップ。(笑)
林:...まあ、みんなやる気あるっちゅう事で。

今後GOATSをどういうバンドにしていきたいですか。

野:結構難しいなあ。
小:んー、結構有名やと気持ちええかな。
林:ああ、気持ちはええなあ。
小:「あっGOATSの人!!」って、そんな感じで。「えっGOATSと出来るの!!」って言って貰えるぐらい。
林:音は今のままやうか、変な感じで続けつつ。
野:更に変な感じで。
林:更にマニアックに、変態に、ロリポップに(笑)突き詰めたいな、と。まあ小坂はロリ...
野:うん、俺もそうなんよ。

それでは最後になりますが...

小:えっもう最後? もっとちゃんと...
野:「もうこいつらはアカンわ」っちゅうか(笑)。
小:サウンドの事を...
林:サウンドの事を紹介せんとな。
(後ろから太一氏「俺使用機材とか聞きたいなあ」)

使用機材ですが...

(続けて「そういう事って誰も聞いてくれないじゃん」)
野:聞かれても分からへんで俺ら(笑)。
小:メーカー位しかわからんで、電気系統の。
(後ろの2人「電気系統」という言葉にウケてる)
林:詳しいなあ。
小:「8 差すんですか?」って聞かれても「多分...」って感じ。何で8なのかっていうのが全然わかってない。

野:難しい話されたら「知らん」とは言えへんし、「ああ、そうですねえ~」って(笑)(後になって)「何や今のは!」って。
鶴:バンドの話でもそうやろ。マニアックなバンド名出ても全然わからへんし。
林:あかんなあ。
鶴:全てにおいて「無知」なんやな。
林:まあ「ブレハブ」の事なら任せて欲しいな。(笑)
野:まあ「パチンコ」の事やったら任せろやう感じやな。

じゃあ「音」に対してはあんまり執着みたいなのはないんですか。

林:いや、出る音に対してはあんのやけど、機材に関しては...
小:何を使えばどうとか、何ワットならどうや、とかそういう数字とかは全然。

今日の音も小坂さんと野口さんの音全然違ってましたよね。

野:今日はDEFILEDのスピーカを借りて。で、前の東京でやった時と音が違う。いつもは音質違うなあ。
小:違う。近づけようとしてんのやけど。個人的な「したい音」に。
野:バラバラやねん、だからやりたい事が。
鶴:っていう事は解散?(笑)
小:まだまだ大丈夫やろ。
林:ええ思いつく(笑)

どっちかっていうと小坂さんがゴーストを感じて野口さんがバリバリって感じて。

林:小坂が低音出て、ノグが中高音。
野:中音をカットしても出てしまいいよる。
林:要するにええ機材買え! ゆう事やな。
小:機材には無頓着やからな。
野:今使ってるやつでもそんな使い込んでないっていうので...よう解らんのやな、使い方が。
林:(笑) 使い方が解らないって何年やってんねんお前。シロウトやで。...もうちょっとオタクにならんとアカンなあ。まあ基本的にライブが楽しければええ。
小:パンク的なノリがあるな。ラフな機材で。
じゃあ最後ですけど、ファンに何かあれば。
林:ファンって、ファンいるの? 全国に3人...(笑)
小:50以下位はいるんちゃう。



1st CD「BREATHE」 ECRIPSE RECORD : ECR-03

林: 何言お...
小: こういう曲で「エエ」と気付いたんは結構君はセンスいいよ。見込みアリ。次からまた期待して欲しいわな。まだまだ30%しか出し切ってへんから。
林: そんなんアカンやん、CD出たのに30%なんて、全然やる気ないCDや(笑) ライブで暴れてください。そして...心より「いい思いつく」にして下さい。
野: 愛を込めて。
林: 愛を込めて...FROM 滋賀。
野: やっぱ気に入ってくれと嬉しいし、多分より複雑になる曲も出てくるやろ、と。多分それもあるなは気に入るでしょう。
鶴: ...あらたまるとないなあ...GOATS...GOATS...GOATSいいぞあ!
(一同爆笑、特に後ろの2人)
小: とにかく聴きなさいと。

このインタビューはライブ終了後に収録されたもので、片付けの音やら外野の声とかもあってインタビューだけに集中できなかったのか、とってもフランクなインタビューになってしまったという印象があります。ステージ上のシリアスな面もGOATSだし、これもGOATSなのです。この後に集合写真を撮らせてもらったのですが、何とかカメラのレンズが壊れてしまっていたのでピンボケちゃって全然ダメでした。すいません。とにかく、スラッシュやデスに抵抗がなくて、まだGOATSを聴いたことがない読者は是非CDを聴いてみてください。絶対に損はさせないハズです。

c/o GOATS / 小坂 宏樹
〒520-21 滋賀県大津市大江4-11-14

HIDDENの 丹羽英彰氏 脱退の件に ついて 激辛な見解 を述べさせて いただきます。

(文責：すぎ/KABBALA 編集人)

HIDDENからヴォーカルの丹羽英彰氏が脱退した。脱退ではなく「解雇」であるという噂もあるが、そんな事はどうでもいい。ショックだった。私はある人からの電話によってこの事を知ったのだが、私は「嘘だぁ～!!!」と口では言ってみたものの次に続く言葉を見失ってしまった。そりゃそうだ。約1カ月前に電話でインタビューした丹羽氏が、である。その電話の主は、そうなってしまったまでのいきさつみたいなのまで教えてくれたのだが、真偽の程はともかくとして私はここで真相について触れるつもりはないし、言う必要もない。ハッキリ言おう。これはファンに対する「裏切り」である、と。ここまで断言してしまうのは言い過ぎだとか暴言だとか見る向きもあるだろうし、関係諸氏は明らかに不服であるだろう。「お前に何が分かるんだ!」と激怒されるかもしれない。でも私はそれに対してこう答えたい。「じゃあ今まで応援してきて、メジャーデビューする事を喜んで、発売される日をいつかいつかと楽しみに待っていたファンは一体何なのか。単に踊らされただけだったんですか。」

今までもHIDDENはメンバーチェンジをしてきた。それはバンドとして本当によくある光景であり、それについて今の私のように目くじらを立てる人なんていなかった(この件についてもそういう人はいないけど)。ドラマーやベーシストも確かにバンドのメンバーとして5分の1の責任を持っているわけだから、ヴォーカリストにしても同じ「単なる」5分の1と考えれば、何の事はないよくあるメンバーチェンジに過ぎないだろう。でも個人的にHIDDENのヴォーカルに限ってはそう捉える事は出来ないのだ。よく「ヴォーカルはバンドの顔である」と言われる。ファンの一人としてHIDDENが生み出す曲が好きだったしHIDDENのヴォーカルが好きだった私にとって、HIDDENの楽曲と丹羽氏のヴォーカルは切っても切り離せない関係であり、ヴォーカルはバンドの顔であるとするならば、これ程の顔はなかなかないと思っていた。だからこそ、だからこそ、私はこう思う。「丹羽氏がヴォーカルじゃないHIDDENはHIDDENではない。」

残った4人は新しいヴォーカルを加えて改めて活動していきたい意向のようであるが、それならば今までの楽曲を継承する、しないという

話を置いて、願わくばHIDDENというバンド名を改名して欲しい。これはあくまで個人的な意見であるので多くの意見を代表するものではないが、私自身は丹羽氏が抜けたことによってHIDDENは一度終わったと思っている。だからこそ新たな気持ちでバンド活動を続けていきたい欲しいから、HIDDENというバンド名を改名して欲しい。またスタートラインから始めて欲しい。

正直HIDDENにはかなり期待していた。単にメジャーである事に浮かれていたのではなく、HIDDENならこの閉塞し息詰まったシーンの現状を打破してくれるかもしれない、という多くの関係者がとうの昔に捨て去ってしまった儚い夢を現実のものとしてくれるかもしれないという希望を抱かせてくれたから、その夢に憑てくれるだけの意気込みと気迫を感じていたから、ファンの一人として後押ししていたのに...メジャーなる存在は不安定であったり不確定なものを一番嫌うと聞いたことがある。それを考えるとHIDDENのCDはお蔵入りとなる可能性は高い。あくまで勝手な想像だが99%イチクからは出ないと思われる。シーンを変えたかもしれない一枚がこんな数奇な運命を迎えることになるうとは一体誰が予想しただろうか。

ここまでぐだぐだと主観的な感情だけで思いの丈をぶちまけてきたが、実はこの件に関して、丹羽氏、桑原氏の双方共何の連絡をとっていない。それを無責任と言うならそれで構わない。ファンとしては裏の真実なんてどうだっていいことで、要は表面に見える結果がどうなのかという事が全てなのだから。両当事者の意見は一言も聞いていないのだから、どちらかに偏った見解はないはずである。もう一度最後に断っておくが、これはあくまで私の個人的な見解であり、そういう事である。これが全ファンを代表する意見だなんてほんの一片も思っていない。だからこれを読んで、もし反論なり意見があったら、どうか教えて欲しい。当然これとは180°異なる意見もあるはずである。

これはあくまでも噂だが、春には丹羽氏がHIDDENに復帰するという噂が一部で流れている。もしそれが現実となった際には、その事実を私は素直に喜べるのだろうか。



AGGRESSORさんから届いた手紙の中に、どうもゴッキーらしき絵が書いてあったので「ああ好きなのかなぁ」と思っていたら新デモではこんなに大胆に使っていました。ゴッキーももうすぐラストを迎えますがGOLDEN LUCKYは史上最強の理不尽漫画だと思います。「だから何だ!」...別に何でもないです。



ちょっとだけにゅーす

CASBAH5/12ライブ決定

昨年の4月以来ライブ活動を行っていなかったCASBAHであるが、ドラマーチェンジ後(元VANGUARDの小林氏)としては初のライブが決定した。5月12日(日)新宿アンティノックで、対バンはBEDLAM、SABBABZ、ガムテジの計4バンドで行われる予定(ちなみにこれはSABBABZ企画だ)。また、これ以後のCASBAHのライブは今の所未定のようです。ところでCASBAHは4月現在レコーディング作業に突入しているハズ。これはライブではお馴染みの“Colors”を含む新曲6曲を収録した音源を制作する為で、これがテープという形で発表されるか、CDになるかは「出来次第」といった所らしい。全体的には94年のデモの延長線上にあるようで、90年型CASBAHのファンは期待して待つべし。夏頃にはリリースできるかも？

SABBAT NewAlbumをリリース

ライブの数よりリリースする音源の数の方が多い(嘘)SABBATがとんでもないCDをリリースした。「THE DWELLING ~ The Melody Of Death Mask ~」と名付けられたこのアルバムは何と1曲しか入ってないのだが59分50秒もあるんですね。しかも日本盤だけの特典としてボーナス・パートが加えられている(つなぎとしてはどこがボーナスだか判らない位見事な展開でした)。ボーナス・パートっていうのが凄いですね。「1曲」という事へのこだわりを感じさせてくれます。ディスクユニオン、ディスクヘヴン各店にて絶賛発売中。ちなみに一部でSABBATイタリアツアーの噂がたっています。これは嘘。「やれたらいいね程度の話で具体的な話は一つ出ていない」状態なのだそう。でもいつか実現させて欲しいと思います。

RAGING FURY 5/1菊野脱退

昨年12月27日のライブで見事に復活、新作デモも好評なRAGING FURYだが、何と5月1日(水)難波ロケッツのライブをもってドラマーの菊野ちゃんこと菊野氏の脱退が決定しているとの情報が入ってきた。これからという時だけに残念だが、一刻も早くRAGING FURYが健康体で活動できるようになる事を願うばかりだ。

VIGILANTE新ペースト決定

昨年末以来ベース、ドラムの脱退が相次ぎファンの気を揉ませたVIGILANTEに、ペーストとして海野(うんの)氏の加入が正式に決定した。既に2/17のライブでは早くもお披露目が済んでいるが、残るドラマーももうすぐ正式決定か？発表が待たれる所だ。

大雪がメタルバンドを直撃

この冬に猛威をふるった大雪が各地でメタルバンドを直撃している。去る12月26日に横浜で行われたライブに参加予定だった大阪のSUBCONSCIOUS TERRORが大雪のため来れなかったで「大丈夫かなぁ」という思いを抱きつつも翌27日のライブが大阪であるTERROR SQUADとCEMENTは機材車を大阪へ向けて走らせた。しかしやっぱりハマってしまい27日夕方の時点でまだ名古屋という有り様。こ

でCEMENTは高速を下りて新幹線で大阪へと向かい本当に、本当にギリギリで間に合うというウルトラCをやったのけたのだった。勿論リハもなし、ぶっつけ本番のトリだったそう。また2月18日のライブでは広島のアグレッソアがハマってしまい、残念ながらライブには間に合わなかったものの深夜に到着して打ち上げには参加したそう。またアグレッソアはこの日発売予定だった新テープをヘヴン等にしっかり卸して帰ったそう。とにかく災難な大雪だったようだ。

TERROR SQUADの新曲は？

曲作りの遅さでは定評のある(?)TERROR SQUADだが、幾つかライブが決定している。特に大阪は約2年振りとなるので大阪のスラッシャーは必見だ。

4月21日(日)目黒ライブステーション(with CEMENT、BEDLAM、DEFILED、DISGUST)
5月1日(水)大阪難波ロケッツ(with RAGING FURY、NEGAROBO)

5月2日(木)目黒ライブステーション(with NEGAROBO、UBI-GUN、DESPERATE CORRUPTION)

6月29日(土)目黒ライブステーション(with CEMENT、パワーメタル系の数バンド)
今新曲2曲を猛りハサル中の彼らだが、「自分達が納得のいく形じゃないと演りたくない」という事でもう少し時間がかかる模様。

北海道&東北ふらっしゅ

1:「メタルに疲れた」とSILVER BACKを脱退した村野氏は、しばらくはメタルの世界から離れた所で活動していきたい模様。残念である。
2: NEGAROBOのギターとドラムが5/2目黒ライブステーションのライブをもって脱退する事となった。後任はいずれも決定している模様。東京のファンは駆けつけろ！

3: FATIMA HILLにヴォーカルのYUKO嬢が戻ってきたという情報が入ってきた。

4: 仙台のデスメタルバンドDISTRESSは現在活動を休止しているらしい。復活するのかこのままなのかはちょっと不明。

5: 盛岡で活動している5バンドを集結したオムニバス・テープ「SHOCK OUT NOW」を聴いてみたいという人は送料込みの500円を下記住所まで。〒020岩手県岩手郡滝沢村大崎94-70-101 BACK FLIP迄。THEFT、ROSALIND他が収録されている。

東京ふらっしゅ

1: 今号でインタビューに応じてくれたSTONE EDGEは、何とBEDLAMに続いてプレイヤー誌のインタビューを受けた。これはCD並びに11/30のライブが評価されているものであるようだが、いつ載るのかは不明。多分6月号辺りではないかと思う。ファン必読。

2: 東京を代表するパワーメタルバンドGUARDIAN'S NAILは新しい音源の制作に取りかかっている。上手くいけばCDになる可能性もあるようだ。

3: 横浜のBLASDEADが大阪のLARD REC.からフルCDをリリースするという噂がある。詳

細は現時点では不明。

4: マニアを唸らせたピュアメタルファンに贈る入魂の一撃AETURNUS誌のVol.0は定価500円で絶賛発売中です。問い合わせは、〒152目黒区鷹番3-6-8 田中楽器内AETURNUS芹沢まで。ちなみに内容はGRAVE DIGGER、NEVERMORE、TARROT等。

5: 群馬の江原氏が「TOTAL CARNAGE」というフリーペーパーを発行している。読んでみたいという人は80円切手を同封の上、〒373群馬県太田市宝町207 江原 利郎 迄。

名古屋&東海ふらっしゅ

1: 元DUSTBINの加藤は群馬から浜松へと里帰りをしたのを機に、浜松でスラッシュバンドを結成すべく動いている。加藤はベースをマイクに持ち変えて心機一転頑張るようです。静岡のシーンを活性化してくれる事を願っています。

2: BEDLAM人気がうなぎ登り。これも地道な営業活動の成果ということで4/19(金)難波ロケッツ、4/21(日)目黒ライブステーション、5/12(日)新宿アンティノック、5/31(金)難波ロケッツのライブが決定しています。

3: 名古屋のDISGUSTと埼玉のDESPERATE CORRUPTIONがスプリットEPをリリースする。DISGUSTは3曲を、D. CORRUPTIONは2曲を提供する予定。限定800枚で5月か6月には発売される見通し。

4: 色々とメンバーチェンジで苦労したVOIDDの2ndCDのリリースが決定した。「TEXAS CHAINSAW」と名付けられたこのアルバムは全12曲入りとなる模様。発売記念GIGは4月27日(土)名古屋ミュージックファームにてDISPLACED PERSON等をゲストに行われる。

大阪ふらっしゅ by HM/HR Laboratory)

1: 元BRAINの小野大介(G)がSPICEという4人組で1月26日難波ロケッツでデビューを飾った。一年振りである。音の方はBRAINを継承しているとか。

2: CRYSTAL CLEARのギター、島はどうやら上京し、既に解散したZENITHのヴォーカル、キーボード、ドラムと合体するようだ。詳細は不明。

3: 昨年末大阪はミナミのアメリカ村で「ROCK ROCK」という喫茶がオープンした。金曜はあの和田誠氏がDJ。当然CD、LPの持ち込みO.K。ライブ後のたまり場になりそう。

中国&九州ふらっしゅ

1: 広島のアグレッソアは解散した模様。これで中国地方で活動しているスラッシュバンドは殆どアグレッソアだけの状態となってしまった。

2: 佐賀のコミック・ポーズ・メタルSPERM BANKは大幅なメンバーチェンジがあったようだが元気に活動を続けているらしい。そのSPERM BANKの助川氏が佐賀GEILSで「POSITIVE GROWTH」という企画を行っていく事になった。記念すべき第1回はCEMENTとTERROR FECTORを呼んでDEROGATE(佐賀)SM SNIPER(長崎)の計5バンドで4月17日(水)に行われる。また第2回は5月11日(土)に名古屋のVOIDDを呼んで行われる。そんな助川氏は対バンを募集している。佐賀でやりたい人集まれ！〒840佐賀市本庄町本庄961-7-122 助川 徳郎 TEL 0952-26-4384(内線118)迄

きいてみた かんそう

このコーナーは日本国内でリリースされた
メタルシーンの周辺で頑張っているバンドの
音源の「きいてみた感想」を紹介するコー
ナーですのでよろしく。最近テープを送って
くれるバンドが増えてちょっと嬉しいです。送っ
ていただける場合は値段と連絡先を必ず明
記してくださいね。但し絶対に載るとい保証
は出来ませんがその点はご了承下さい。

これやがな。最近忘れつつ感動は、いいい
ねえ。やっぱり博多のバンドや。ギター2人に
B. Dr. Voの5人編成のこれぞHEAVY &
POWER METALというサウンド。最近ではた
まにアメリカのバンドがヨーロッパのイン
ディーズ・レーベルからデビューしてぐらい
やが、これだけストレートに男らしいサウンド
を演られると稀少価値やわ。なんで首都圏や
関西からはこの手のバンドが出てこへんの
やる。これが基本やね。80年代のHMヤンクと
言われればそれまでやけどあの独国臭もな
く、安心して一気に聴ける。彼らのレコードラ
ック覗きたくなるわな。あつ、そやそや、これは
アルティメート・ネットワークのジェフにすぐ教
えなあかんわ。誰にも教えんでふたでこっそ
り楽しもな。ジェフ。(金田)

博多のパワーメタルバンドです。最所&金
田氏の大阪マニアックス・コンビが絶賛する
ので興味を持ったのですが、いかにせん問
合わせ先がわからない。どうしようと思てた
ら某氏 敢えて名前は伏せます からテープを
頂戴しまして、期待に心躍らせてテープを回
しましたところ、これが噂にたがわぬ良品で
体も踊ってしまいました。臭すぎるくらいに臭
くてコテコテかも知れませんが、とにかく鋼
鉄! 頭振るにはもってこいの音だと言えます。
ドラマの影響か最近ビュアという言葉が流
行っていますが、このバンドはビュア・パワ
ーメタルです。この純粋さには心洗われる思い
がするといったら言い過ぎでしょうか? 時代遅
れだと言われようが、私はこの音を断固支持
したいと思います。(すぎ)

AUGUS SATAN'S WAR LORD

1. INTRO
2. SHOOTING TO THE VIELD SKY
3. DYNAMITE FROM HELL
4. SATAN'S WARLORD
5. BRAIN SWORD WARRIOR
6. SOLDIER'S IN TIME

c/o 問合わせ先不明。
各ライブ会場で販売中。
6曲入り。¥1000。



RABIDLY DOGS BLEED OUT

1. LIGHT AND SHADOW
2. I'M FLYING
3. MIND TO DO IT!
4. BLEED OUT

c/o 〒983 仙台市青葉区中
江1-4-23しん荘5号
Die SUKE TAG

この名前を初めて聞く人も多いと思う。仙台
の4人組である。まず初めに断言しておくが、
これはイイ!!是非このRABIDLY DOGSの名
を頭の片隅に留めておいて欲しい。結成は4
~5年前にまで遡りHR系のバンドとして活動
していたようだが、何度かのメンバーチェン
ジにより音楽性も今のようなスラッシュの方向
性になったらしい(現在ではオリジナルメン
バーはいないと聞く) 全体的な印象としては
ベイエリア系の音にミクスチャー系グランジ
やデスメタルの味が加わったかのようで、し
かしあくまで勢いと気持ちよい流れ方は正し
く土台はメタルだと言える。特にこのバンドで
耳を魅きつけられるのはオリジナルティ溢れる
Voの声であると思うこのVoは本当に耳に残
り、バンドの顔だつるものとして相応しいもの
を持っている。久し振りに声とヴォーカル・ライ
ンが印象的なバンドに出会ったと思う。そう
いった意味でも曲の一つ一つに違つた表情
があり、フルアルバムを聴きたくなるような気に
させてくれた。仙台で孤軍奮闘する
RABIDLY DOGS、今後はデス色を強めてい
きたいとの事だが、私個人としてはこのままの
姿勢で突っ走って欲しい。仙台だろう
がどこだろうがカッコイイものはカッコイイとい
う事を改めて認識させてくれた一本。
4曲入り。無料配布。(すぎ)

今月の一押し



CEMENT DONOR

1. BLOW DOWN
2. SOS
3. PTSD
4. THREATS
5. MANIPULATION WORLD
6. ICU
7. LOGOS
8. LAW
9. INFORMED CONSENT
10. folie a deux
11. HYPER AROUSE
12. INTO THE VOID
13. OVER VENTILATION
14. DOPRIVATION NEEDS
15. SYNAPSE
16. DONOR
17. RONOD

c/o 〒156 世田谷区経堂1-
18-17-101 太 太一

2月にレコーディングを終えたばかりの
CEMENTから早速テープが送られてきた
ので紹介したいと思います(これが発表され
ている頃にはもう店頭に並んでいるかも...)。
全17曲とかなり気合いの入った内容で、既に
ライブでオ馴染の曲も何曲か収録されていま
すが、これがまたレコーディングという作業を
通して新たな息吹が吹き込まれたかのように
荒々しくかつ繊細でとにかく素晴らしい!! 各
パートが一体となって荒れ狂う轟音の渦の隙
間から見え隠れする細部へのこだわりが何と
もイカしてます。さらに1曲1曲が濃縮されてい
て、全体としてバラエティに富んだ印象を与
えるかと思ひます。1stに比べてよりハードでコ
アな世界が構築されており、CEMENTとい
うバンドの方向性がハッキリと見える好盤と
言えるでしょう。バンドとしての一体感と言
うに及ばず、見ごろ聴きごろで非常に美味しい
です。個人的に厳しい事を言えば、ドラムの
音が生っぽ過ぎるのもっと無機質な方が
「らしい」かなあとありますが、GOATSと同
じスタジオリブ事音質面では十分平均点
をクリアしています。KABBALA読者なら選
べては通れないICDでしょう。お金がないなん
て言ってる場合じゃないぞ! そういや
CEMENTの音を指してFEAR FACTORY
云々とか言われているようですが、私は全然
気になませんでした。今回も勿論ノイズト
ラック有り。狂乱の35分をあなたに。
17曲入り。¥2400。(すぎ)



AGGRESSOR URGE TO KILL

c/o 〒730 広島市中区富士見町8-18-605
BRAIN BASTER RECORDS

広島で孤軍奮闘しているAGGRESSORの最新デモは全9曲とカセット・アルバムとも言えるものとなった。CDになるといふ噂もあったが、結局こういうテープという形に落ち着いた模様。サウンドはどちらかといふと米国スラッシュに近い印象があるが、疾走感と力に拘ったスラッシュの血はこのAGGRESSORにも脈々と受け継がれている。このデモは昨年の春にリリースされたデモに収録されていた6曲の再録が中心となっており、メンバーチェンジを経た今のAGGRESSORの集大成となっている。音質的にはそれ程良くはないものの、カッチとした演奏にザクザクとした荒々しさも加わって9曲一気に通して聴かせるだけの實力を持っているAGGRESSORなので今後の活動が楽しみである。2月18日に観られなかったのが残念でならない。9曲入り。¥500。(すぎ)



AIMING HIGH UNDER MY FLAG

c/o 9-2-20, Okudo,
Katsushika-ku, Tokyo 〒118?
YASUHIRO KAWAGUCHI

恐らくACCEPTの曲名からバンド名を採ったと思われる東京の4人組のデモ。何故そう思ったのかと言うと、音楽の方向性がジャーマン・メタルからの影響を強く感じさせるからである。タイトル曲は初期HELLOWEENを思わせる、いかにもジャーマン・メタルといった感じの曲ではあるが、心地良い疾走感としつかとした力強さがメロディアスな展開と上手くマッチした佳曲で、ライブでもハイライトになりそうな曲である。B面の曲はNWOBHM調のモルドンボの曲だが、タイトル曲に彼らの魅力が凝縮されていると考えたい。あとはこれに独自の存在感と男臭さが前面に出せるようになれば、もっと大きくなれると思う。BRAVE BOMBERあたりが好きな人には要チェックの存在だ。2曲入り。要問い合わせ。(多田)



BEDLAM BARE YOUR SOUL

c/o 〒457 名古屋南区三吉町1-92-1-111 OVER
FLOWING RECORDS

名古屋一の元気者BEDLAMの2ndデモである。今や飛び鳥を落とす勢いと言えなくもない活躍ぶりである。外野の目に触れる機会も自然と多くなってきた彼らだが、果たしてこのデモはそういった目を魅きつけるだけの作品に仕上がっていると言える。思わず体を揺らしてしまふ切れ味の鋭さは諸先輩方の域に近づきつつあるし、自分達のスタイルを確立しつつあるので諸先輩方の影は希薄になりつつある。特にリズムに今後のBEDLAMの方向性を感じた“Blood”なんかは単純に気持ちいい。安定感と攻撃性を両立させ持続させている事が今後の課題かも。KUMA氏のVolは“Eat”のようなレイジな曲が一番ハマっていると思う。ナゴヤン・メタルにここに在り! 6曲入り。¥300。(すぎ)



CHOP LET'S ENJOY PRESENT TIME!

c/o 〒572 大阪府寝屋川市
平池町25-2-102号
林 徳雄

期待させるだけさせて勝手に無期限活動停止にしてしまった笑。CHOPの音源、5曲が英詞で4曲が日本語であるが、このバンドの魅力は日本語の方で強く表れていると思う。というのも歌詞の世界に入って笑うことが出来るからだ。ヒップホップなノリがベースではあるが、グランドからレゲエまでおとあらゆる音材が使われていてそういった意味では非常に無国籍なサウンドと言えよう。またどうしても見え隠れしてしまう関西風味がいダシとなっている。同じ事を関東の人がやってもこうはいかないし、シークエンスもかなり使い慣れてきたようでフル回転している。mc.ATもまっ青のノリの良さ!なんちゃって。是非復活して欲しい。9曲入り。¥500。(すぎ)



DAZZLE DEAD LINE ~ LIVE

c/o 〒277 柏市宿連寺416-1-501 大沢 TEL 0471-32-3267

多分読者の誰も知らないバンドだと思う。千葉を中心に活動しているDAZZLE(デジール)の Promo・テープである。G&V、B、Dr、Keyといった4人編成のバンドで、自称THRASH INDUSTRIAL NOISE CORE THREATという事からわかるようにインダストリアルな味を持ったスラッシュなサウンドがこのバンドの売りの点である。ヴォーカルはデス声にながらぬダイミ声的で、聴いた感じではよくわからないと思うが歌詞は日本語詞も混じっている。ライブの時の音の生録りであるが音質はいいし、演奏もまともになっている。やや地味な存在だが、かばら読者にも受け入れられる要素を秘めたバンドだと思う。何故かヴィジュアル系とやる機会が多かったらしく、スラッシュ系への対バンを募集中との事なので興味を持ったバンドは左記まで。4曲入り。多分無料配布。(すぎ)



EAT RED MEAT ISOLATION

5.R.M. RECORDS
品番HHT-80

元THE COOL BEAUTYのGENOA組(G&Vo&B)の2人によるバンド。日本語によるパンクッシュなR&Rとも言うべき音楽の方向性に変わりは無いのだが、大人の激辛パンクともいえる前の路線と比べると、このメンバーから予想出来るようなハードコアに近いノリが強く、何か先祖返りをしたかのような勢いが前面に出ている。ジャック・ダニエル片手にバイクを乗り回すバイカーといった雰囲気にも近く、矢沢永吉より先MOTOR HEADという人にはおススメ(よくわからんが...)。今頃GENOAを想像する人はいないとは思いますが、富田氏の言葉をぶつける様に投げかけるVoはいっ聴いてもイカしてる。若々しさだけでなく、ベテランならではの貫禄も十分に感じさせる。13曲入り。¥2500。(多田)



ガムテジ 歌と踊りがギッシリつ まったリズムの爆弾!!

c/o 〒276 千葉県八千代市
大和田980-21ハイツサンパーク
岡野 秀之

ガムテジが早くも2ndデモを引っ提げて帰ってきた。ライブでは既にお馴染みの曲も当然収録されており、全体として前作に比べてヴァリエーションに富んだ印象を受けた。代表曲となるであろう“Elvis On Stage”のような曲を聴いているとついノイロックスをハードコアにしたような...かと思ってしまうのだが、そういった曲が活きるバンドがガムテジであるのも事実である。メタル臭はあまなく、R&R的なノリというか、何ともいえない軽さがあってそれがガムテジらしさにつながっているのだと思う。ライブ告知の紙に書いてあったんだけど、マンコの前に娯楽なし、マンコの前に苦悩なし!とどいかに岡野さんらしい。思わず笑った。6曲入り。¥300。(すぎ)



金谷 幸久 EAU ROUGE

THIRD STAGE RECORDS
品番TSR-003G

元EBONY EYESのG、金谷幸久氏のソロアルバム。参加しているミュージシャン(元TERRA ROSAとかWOLFだもの...)の豪華さにびっくり仰天して、迷わずレジェと直行してしまっただけ、このメンバーにおっと思った人は買っても損はない作品である。日本人のこの手の作品では久しぶりにワクワクしながら聴きまわって興奮は今だ醒めず...。これだけのメンバーが勢揃いして繰り広げられる様式美的饗宴は、正に王道を突き進んでいくかのように堂々としたものになっている。ソロによくあるデクによるマスターベーションは全くなく、主役は自分、主張しながらも曲を活かしているのがナリイグネス。この辺のメンバーが集まって一つのバンドとして動いてくれるといいんだけどなあ...。やっぱりこれは夢物語ではないのでしょうか。10曲入り。¥2800。(多田)



KING OF DARKNESS AGGRESSION IN RAGE

c/o 〒542 大阪市中央区西心
齋橋2-18-6アヴェニュー心齋橋
302 ディスク・ヘヴン大阪店

前号で紹介したKING OF DARKNESSの2ndが早くも登場。このデモは面倒でもB面の1曲から巻き戻して聴くべし。それだけB-1、B-2の出来は素晴らしい。すべてのトラックを今回も持ち回りで録音しているようだが、音質、バランス、当然演奏技術も今回も裏切ることはいない。前作は日本語で歌っていたが、今回は全て英詞。B-1の中間部のギター・アレンジ、B-2のT.N.T.は3の楽曲とコーラスは今までの日本人がやって恥ずかしいレベルを十分にクリアしていて、メジャーをびびらす音を完成している。今すぐ、東京のネイル・フォース・イーストに連絡されたし。前号でLOUDNESSのフォローーと言うてすまんかった。あやまる。ジャケット・デザインも気合いが入っている。6曲入り。¥1000。(金田)



NEMESIS NEMESIS

c/o 連絡先不明

東京を拠点に活動している4人組パワーメタルバンドの多分1stデモ。ジャケットを見るとちょっとばかしヴィジュアル入っているなぁと受け取れるのだが、デモ全体を聴き終えた印象としては杞憂だったと言える。オリエンタルなムードで幕を開ける1曲目は一転してアッサリめのパワーメタルに展開してちょっとガクッときたが、なかなかどうして影のあるメロディとハモリの美しいコーラスが美味しい。パワーメタル=灼熱の炎とするNEMESISは青白い炎を想起させ、さしずめ陰パワーメタルといったところか? 幻想的という意味では3曲目なんてプログレハードの世界に近いかもしれない。デモとしては良く録れている方だと思う。まとまりの良い作品だと思う。3曲入り。¥500。(すぎ)



KONK KONK II

c/o 〒178 練馬区東大泉7-9-2
山口コーポ5号室
沖本 浩子

前号で紹介したKONKの2ndデモが早くもリリースされました。サウンドは前作で聴かれたZENI-GEVAの重金属ハードコア・ノイズ・ミュージックから更に一步踏み込んで、より層わけ解らない感じになっています(ベースが抜けた事もその原因か)。攻撃的な面はそのままだ、冒頭の「宇宙の神秘」や3曲目の「四面楚歌」といったインスト・ナンバーはKONK流息抜きとも呼べるような曲で、またそれが変にくすぶっているようで妖しいと言えます。主幹娘の絶叫がこのバンドの個性となっている点も見逃せません。5曲目「わっしょい」は1stの再録ですが、ベースがない為に無秩序で荒々しくなっています。カラージャケットは良いのですが音質の低下(前作比)はいただけないです。5曲入り。¥400。(すぎ)



PINK PANTHER THIS TAPE IS SHIT !

c/o 〒198 東京都青梅市
友田5-367-1 畠中 正彦

おうおううなっとる。うなっとる。ベースはピンキとつぱっとし。Volはモーター・ヘッドしてあるやないの。名刺代わりとしては十分に合格点。東京は青梅市出身のGがVoを兼任しているブルー・タルス・スラッシャー4人組、PINK PANTHERの登場だ。国内外共に最近の若手から出てくる音は実にこの手が多い。3/4ノンドも重くなったイベントになると正直、誰が誰なのかよう分からんってくる。それだけ激戦飽和状態の中個性を光らしていくのが今後のテーマやろか。たった3曲なのだが実にカッコエエ。名古屋、東京と精力的に活動しているようだが、どう頭ひとつ抜きに出てくるか非常に楽しみ。ジャケット・デザインか、ロゴにもう少しこだわらなあかんわ。それ以外はTHIS TAPE IS GOOD ! 3曲入り。無料配布(190円切手同封)(金田)



MANIPULATED SLAVES Same

c/o 〒562 大阪府箕面市
船場西2-12-4-208
陸山 豊 0727-28-3017

大阪のバンドでこれが2ndデモになるそうだ。バンド名だけ見ると何だかデス系のバンドみたいだがこれが違う。スピーディなHMを信条として、アグレッシブなVoとサクサクでありながらもメロディアスさを失わないIG...と書けば、オツとくる人も多いかと思う。1曲目、イントロがバクハツしたかと思えば一転したと意表を突いた展開を続けるので面白いなあと思ってたら、実はイントロと曲目がつながってたりした。スラッシュとパワーメタルの丁度中間で感じだろうか。ただメロディがまだまだ弱いと思うので、もっと突っ込んで欲しい所だ。あとVoももう少し聴かせて欲しい。同郷のSUBCONSCIOUS TERRORと同様、磨けば光る逸材かも知れない。4曲入り。¥300。(すぎ)



SIGH INFIDEL ART

CACOPHONOUS RECORDS
品番NIHIL 7CD

フルレンスCD第2弾となる本作はデジパック仕様で何とビクチャーCDである。BLACK METALが日本で認知される遥か前からこのスタイルでやってきた彼らは、スタイルに囚われた所謂BLACKフォロワー達とは一線を画す存在だ。さてこのアルバムではKeyの使い方が半端じゃなく凄まじい。生ピアノ、フルート、チェンバロ...もうこれはユーロ・プログレと言ってもおかしくない位の裝飾だ(但し中身は当然BLACKING METALですよ)疾走するバンドにピアノが絡みつくようなThe Zombie Terrorのサビなんてマジでゾクゾクくるものがある。拘りが何産んで、世界に通用するオリジナリティを確立した好例と言える。かな? やばいっす。6曲入り。¥2000前後(輸入盤につき)(すぎ)



MENTALLY INFECTED MANIPULATION

c/o 〒339 埼玉県岩槻市
本町5-6-47 関根 達矢

埼玉の若手4人組のプロモ・デモとなる初の作品である。一概には言えないが方向的には現在のMULTIPLYやBRUTAL TRUTHに近いと感じる。ハードコアマインドを持ったグラインド系のデスメタルといった所か。正式なDrがいるにも関わらずマシーンを使用しており、全体としての実力はこのテープからは判断できないものの、そんなに悪くないと思う。まだ結成から1年強ということもありこれからのバンドであるという印象を受ける。音質的にはやや平均点以下であり、これは本人達も十分承知のはず。次作に期待したい。このまま深く突き進めば良いバンドになると思う。リフとリズムがいい。リフを指しているとの事ですが頑張ってください。5曲入り。¥200。(すぎ)



SPERM BANK お、徳郎尊氏

c/o 〒840 佐賀市本庄町本庄
961-7佳寿荘122号
助川 徳郎

佐賀の自称コミック・ポーズ・メタルSPERM BANKの2ndデモ。ゆっただとしたグループ感を基調としたサウンドでハードコアにならんない(リフに近いか)。オルタナ/グランジ系と呼べるかもしれない。歌は日本語で、又チャックやガーリックのような頭の悪い歌詞がチープで好きだ。“Mr. M”はありがちだが“636”等他の曲の視点は面白いと思う。ただ、歌詞が歌詞だけに全体としてもっとはきけて欲しい。こいつらバカじゃねーか?と思わせるくらいに破天荒にブチ切れた方が活きてくると思うのだが。何か今バンドが大変な事になっているようだが、演奏はともかく気迫だけはレベルを落とさずに頑張ってください。九州は博多だけではない。4曲入り。(すぎ)



SUBCONSCIOUS TERROR ENTROPY

c/o 〒662 兵庫県西宮市甲東園
1-10-9-204 浜崎 俊秀

実を言うと、このデモを手にするまではバンドの存在すら知らなかったのだが、これが2ndらしいし、全3曲で、約25分という大作主義のテクニカル・デスラッシュといった感じだが、Voの唱法とDrのプラストを除外すれば割とスラッシュ寄りなので、以外にサッパリした印象を受ける。MORBID ANGELにSTEVE DIGIORGIO(元SADUS~DEATH)が加わり、テクニカル指向を強調した曲を書いたかのような感じだなかなか面白いが、長い曲の中で同じような展開が繰り返される事もあり、曲の後半にはアキてしまうのがツライところだ。曲のアイデア自体は悪くないし、時折ハッとさせる部分もあるので、曲をもう少し絞ってスッキリさせればかなり良くなると思う。演奏面もかなりのもので、特にDsはスコイの一言であな あまじにもキレイなプラストは一瞬マシンかと思いましたが、どこかにLIVEを観てみたい、期待度大!!

3曲入り、¥300。(多田)



VERNA-DEAD DEMO

c/o KANAKO TANIGUCHI (Vo)
tel...03-5998-4854

池袋CYBER等でLIVEをやっているという東京のHM/バンドの恐らく1stデモ。女性Voによるプログレ的な要素を持った様式美系のHMといった感じで、この方向なら女性Voの存在意義も見えてくるというもの。歌詞は日本語と英語の曲が2曲ずつで、丁寧に歌詞のイメージまで書いてある。プログレ的な要素を持つと書いたが、DREAM THEATERタイプとは異なり、かなりオーソドックスなHR/HMをベースとしたもので、80年代に出てきた日本のプログレ・ハードに近いものを感じさせる。強いと言うならSTARLESSあたりに近いかな。いかにもドラマ性を持った展開なんかはなかなかのものだが、曲全体を見ると決定的な盛り上がり欠けてしまっているし、Voも聴き手を自分達の世界に引きずり込むようなアクの強さをもっと前面に出して欲しい所だ。ちょっと古臭い音ではあるが、個人的には好きなタイプの音なので結構イケた。もしかしたら化けるかもよ。4曲入り、¥1000。(多田)



SABBAT THE DWELLING ~怨吐宿音

c/o EVIL RECORDS
ER666-010

噂の60分1トラックCDを遂にリリースしたSABBATであるが、帯タタキが「サバ・旋律のB級ホラーコンセプトアルバム」とこれまた凄い、戦慄じゃなくて旋律なのだ。いや本当に旋律なのだ。演っているのは明らかにSABBATなのに音はなんとという私の頭の中にあるSABBATじゃないのである。全体的にメロディアスで泣いているパートもあるし展開も考えられていて確かにB級ホラーコンセプトアルバムなのだ。でもやっぱり1トラックもいいからパート毎のインデックスを設けても良かったのではないかとと思う。究極の自己満足になってしまうのはまずいですが、それでも気に入っている私は一度でもいからこれを完全版としてライブでやって欲しいと思う。OZNYさんがERIZABEATさんにも参加して貰ってね。1曲入り、¥2500。(すぎ)



YOUTHQUAKE 3RD

EXTASY RECORDS
品番EXC-017

このYOUTHQUAKEというバンド、本誌読者には無縁のヴィジュアル系だが、音だけを聴いた場合、かなり侮れない存在だと思うのも確か。前2作ではバイエリア・スラッシュをPANTERAの方法論で再構築したかのような骨のある音を聴かせてくれたが、今作はPANTERAの影響下から見事に脱皮したようで、一回先二回先成長した音を聴かせてくれる。過去に培ってきた音を土台として、MARTY FRIEDMAN加入後のMEGADETHにも通じる、攻撃的でめいながらもキャッチーさを持つ曲が続く。スロー曲や、バラードあたりをしっかりと聴かせてくれる点も見逃せない所だ。攻撃的な面と、多様性とのバランスも良く、アルバム通してアキさせないのも見事だ。OUTAGEやUNITED迎いが好きなThrasher!にはとつき易いと思うが、ヴィジュアル系というレッテルが壁になっているのも事実。難しい所だ。12曲入り、¥3000。(多田)



THEFT WELCOME TO HELL FULL OF WASTES

c/o 〒020 岩手県盛岡市長田町2-24シャトルながまち201
驚塚 将人

かつて盛岡にはDEFILEというスラッシュバンドが存在したが、このバンドはそのメンバーによって結成されたようだ。ちなみにバンド名はゼフトと読む。ザクザクのスラッシュサウンドをベースにヘヴィでストロングでグルーヴィーなアレンジを施したかのようなサウンドは、PANTERAやグランジの影響下にあるのかもしれないが掛け値無しでカッコイイ。系統的には仙台的RABIDLY DOGSとも近い雰囲気を感じさせ、或る種のネオ・スラッシュと言えるのだろうか。最所氏も言っていたが、東日本ではスラッシュ演ると住民税が免除されるのだ(笑)演奏面音質面での平均点はクリアしていると思うところ盛岡にはバンドが5つもあるそうで、ビックリしました。4曲入り、無料配布(190円切手のみ)(すぎ)



ZENI-GEVA FREEDOM BONDAGE

ALTERNATIVE TENTACLES
RECORDS
品番VIRUS 170

ちょっとばかり遅くなったが、ZENI GEVAの新作である。いつもこのバンドで思うのは、力押しであんなに凄まじいまでの重低音のノイズが渦巻く音の塊にたたく圧倒されるといふ事である。今作ではKey等を取り入れるなどして、かなり実験的な方向を見ている。音自体に変化はないが、新たな試みがバンドの音を更にスケールアップさせる事に成功している点は見逃せない。初期のGODFLESHを思わせる、音の塊によって圧迫するかのような重圧感にKeyを加えた上で、メランコリックな旋律が荒涼とした世界の中で淡々と響き上げられており、NEUROSIS迎いぶと思わせる。Voの普通の声での酸欠な語りやKeyはオアシスに見えて、実に不気味な雰囲気を感じ出して、何だかドブ押ししてしまいたい所だ。バンドの持つプログレの要素が新たな試みによって開花し、見事に実を結んだ力作と言える。¥2000位 輸入盤につき(多田)



TYRANT UNDER THE DARK MYSTIC SKY

c/o 〒249 神奈川県逗子市東8-12-54
KEISUKE KUBO

「金田さんは様式美・メロディック系が好きだからこう、この聴かないですよ。という多々ご意見をいただくが、それははつきりして間違っている(笑)デスだろうが、グラインド・コア系だろうがエエモンはええのである。このTYRANTも耽美派デス・メタルと一言でいったらおしまいだが、確かにイタリアかワロリダのバンドですといっても通用する無国籍な点はクリアしているが、やはり世界各国のマニアだけのものになって地上に出てくると、大きなお世話と言われれば、いやがもうヴォーカルライン、リズム的に進化していかなと、DARK RITUALにしてもこの手の耽美派デスは一山なんぼの世界になってしまう。次作は是非人間が叫ぶリズムと生ピアノを前面に出すことを期待したい。はつきりうてこのTYRANT好きです。4曲入り、¥500。(金田)

きいてみた感想の鉄則

一、書いてあることを「うのみ」にしない

たまにいますのですが、ここに書いてあることが全てだとお決して思わないでください。あくまで聴いた人が感じた印象ですから、他の人とは違うこともあるでしょう。言葉足らずな所もあるでしょうが、その辺りはお祈りします。

一、送料を忘れない

これに書いてある金額は基本的に「特にことわりがない限り」音源自体の値段です。ですから必ず送料を加えることを忘れないでください。テープなら¥190で、EPやCDなら¥270でいいかと思いますが。無料配布のテープでも¥190切手はいりますのでお忘れなく。



STONE EDGE

INTERVIEW

8/JAN/1996 pm 9:00

Answer : Mr. JIRO (STONE EDGE LEADER/TIGER
DRIVER RECORDS OWNER)

前記: いつも気さくに喋れる仲間である。いつもの調子で普段から電話にて、とりとめもないことをただまともなく話した内容になってしまったことはお許し願いたい。これは対談である。本日お招きのお相手は去年念願のフル・アルバムを発表し、精力的に活動しているSTONE EDGEのリーダー、JIRO氏である。

(文責: 金田 興一郎)

CDの反響がかなりええみたいらしいけど...

(JIRO: 以下略) まだ3カ月ぐらいいか経っていないですけど、かなり思ったより売れています。500枚は出ているみたいで、実は1000枚プレスして、あと半分売らなきゃいけないんですけど(笑) このペースはうちのバンドでは初めての事です。

CDはどのくらいの期間で録ったの。

ミックスも入れて約10日で録りました。まあ、一日14時間かけて録った日もありますし、ほんとには録り方としてもっと時間をかけて録りたかったのですが、なにぶん、アマチュアなもので予算的な面ではやはりきつかったですね。

JAKEYのヴォーカルをもっとかぶせても良かったと思うんですけど。

うーん。アマチュアの甘えじゃないですけど、時間と金銭的なこともありましたから...

ボーナストラックも2曲入っているし充分な曲数やけどな。

そうですね、8曲入れて¥2060の値段といたらまず損はさせないと思いますし、プレゼントテープは付いていますし(笑)。それにステッカーも。

CD出してからライブの方で周りの見方が変わってきたとか、ある?

うーん、どうですかねえ。今回ツアーで行くところが初めてだったんで、CDを出したからお客さんが来たというわけではなくって、どんなバンドなのだろうと初めて見に来るお客がほとんどですからね。対バンを見に来ていて、うちのライブを気に入って買ってくれた人もいますし、CDを出したから見方が変わったってことはまずないですよ。

ごっつい意地悪い質問やけどCD『GYPSY OF THE NIGHT』は前半のタイトル曲から中盤の“LIVE IN PEACE”“FEEL THE PAIN”と語弊はあるかも知れないけど、デスラッシュもあり~ので二面性が出ていると思うやけど...

それは語弊があります(笑)。まあ、先ほども何回も言っているんですが(笑) いろんな面が出てくるということはアマチュアなんで、好きなことをやりたいなっと! 思っているんですよ(笑)。枠的にはヘヴィーメタルという枠の中ですけど。そういう中でSTONE EDGEがやるとああいふ風になるんじゃないかなと...

“GYPSY OF THE NIGHT”のタイプと“FEEL THE PAIN”のタイプと二面性があるって言ったけど、どっちがバンドにとって反応いいの。

手紙を送ってきたファンの中には“GYPSY OF THE NIGHT”で頭振ってるぜえという方もいますし、“FEEL THE PAIN”をライブでやると盛

り上がった、それは二分されることであってわからないです。また関係者の方は“SUNDAY I LOVE”が最高！って声をよく聞きますし...(笑)
ハイ、その通りです。

ちゃうか(笑)

だからどれが良い悪いというよりも、これが良い、これが良い、これが良いというびとびの感じで、とりあえずこれが悪いって言われたことは今ないですよ。

アルバムについて少し聞かせてよ。

とりあえずですね、細かいことになりますけど、自分はギタリストなんでギターのことに関してだけ言うのと、最近のメロディアス・ハード系のアマチュアのCDとかテープとか聴くんですけど、どのギターも刺(トゲ)がないというんか、聴覚的にこう、ガツンと来るものが少ないなと思ったんですよ。そういう面ととにかくギターは歪ませてグサツと耳に刺さるようなサウンドにしたくなって。多分デモテープとか聴いてる人は分かると思うんですけど、皆ギターの音は丸いと思うんですよ。ライブでは別だと思うんですが、デモテープの段階で丸い音よりも尖った(トガッタ)音、それが今アマチュアのデモを聴いて、バンドの中で一番足りないなと自分の中で思っていたことなんですよ。そういう風に考えると、海外のメタル系とかそういうCDを買って聴いてみるとやっぱり尖っているんですよ。そこらへんで海外のバンドに負けてなるものかという感じで。尖ったギターを、なんて言うのかなあ、歪みを物凄く大きくしてこれ以上やったら音にならないというギリギリの線まで歪ませて、耳に刺さるようなサウンドにしました。他のパートで言うとドラムをよく聴いてる人は分かると思うんですが、ドラムの田代はヘヴィメタル・オクリーの人間じゃないのでその味を出してもらおうという感じで叩いているし、というか叩いてもらったという感じもあるし、だから両方の面が上手く出ているなと。今までにないドラミングだと思いますね。それがこのアルバムのポイントですね。ベースはとりあえずまだ入ったばかりなんですけど...

ベースのトミーは前どこにおったの。

えー、彼は以前九州のバンドでそこそこライブをやっていたー。

なんてバンドでやってたん？

えーっ、(しばらく沈黙して)知りません！(笑)小倉のバンドにいたんですけど、ツアーとかで東京の方に来たことないって言ってましたからあまり知らないんです。

なんでそんなに人脈あるわけ？

それも変な話で、タイガー・ドライバー・レコードのバンドでACID COLORというバンドがいて、そのギターの彼からちょうど前のベースが抜けたときに九州にベースがいるよという連絡を受けて...じゃあ、うちに入ればという感じで...(笑)入ってもらったんですよ。

この話が出たついでに(笑)BLASDEADとかBUGEY' TRUMP'とか、STONE EDGEからファミリー・ツリーができるぐらいOBがけっこう出ていると思うんやけど...(笑)

ファミリー・ツリーはできないですけど(笑)、一番最初の頃、外人のドラムとやってたんですが、アメリカ人で日本語が全然喋れないという。コミュニケーションが身振り手振りで(笑)。

ファーストのCDシングルで叩いていた...

いや、それは大学のサークルの人でして、SIGHのベースの川島君の先輩にあたるのかな。そう言うとかバラを読んでる人には判り易いと思うんだけど(笑)。

結局、STONE EDGEのオリジナル・メンバーはヴォーカルのJAKEYとギターのJIROさんだけやない。その二人がほとんどの楽曲を書いているの？前回のデモ「FIGHT TO SURVIVE」のクレジットもそうやったけど。

ええ、今の所はそうですね。まあ、曲を持ってくるのが自分であって、



アレンジは皆でやっています。ヴォーカルラインと詩はほとんどJAKEYに任せっきりで。

昔から女性ヴォーカルに拘っていたの。

はっきりいって、無いです！(笑)...いや、何故無いかというと、一緒にバンドをやっているというやる気のある人ならばドヘタ以外はOKだと思ってますんで、だからその時点で下手でも上手くなってくれば、別に構わないと思っています。だから上手い奴、上手い奴とメンバーを探したことが無いので、やる気とか根性とそっちの方が大切だなと。

STONE EDGEは結成以来ずっと英語で歌ってきてるよね。日本語で歌うってことは考えられない？

えーっ、自分の中ではどっちでもいいと正直思っておりまして。たしか昔、音源出すときに話し合ったんですけど、前任のベーススト、江成が「英語でいこうよ」という話を出してきて、英語でいこうかと簡単に決めたんですよ。で、どうせ英語でやるならばって最後まで英語でやるよということになって。自分では別に拘っていないんですけども、英語でやるならば海外のシーンにもやはりコンタクトをとってやっていかなければと...。だから英語一本でいくぞと、そんな感じですね。

売のために日本語でやるということは今後考えられない？

うーん、山のようなお金を積まれたら分かりませんけど(笑)ハハハ。

こりゃ悪問でした。今回のアルバム制作、または曲作りで苦労したことは？

実は今回のアルバムの8曲中、ボーナストラックの“SHOW IT ALL”も入れて7曲は前のメンバーで作った曲で、“SUNDAY I LOVE”だけ今のメンバーで作ったんですよ。アレンジはその時とは変わってますけど。要するに前のメンバーのときに既にリハーサルとかやってたんですよ。

じゃ、江成氏とか、アキラ氏とか前のメンバーの時に曲は出来てたんだ。ほな「FIGHT TO SURVIVE」の延長線上といっても過言ではない。

そうですね。でも「FIGHT TO SURVIVE」と別で作ったんですけど、新しくメンバーが入ったんで練り直したけど。

ピアノとかキーボードに拘っていた？

これも変な話なんですけど、うちのバンドというか俺の考えというのは、「出来るのならやろうよ」と。ピアノ弾けるんだったら弾こうよと、例えばフルートが吹ける人がいたら、じゃあフルート入れてみようとか多分なると思うんですよ。だからその場にいたから、そういうアレンジを入れたんです。出来ないことはやりたくない、しかし、出来ることがあるならば取り入れてみよう、という風にいつもバンド運営というか曲作りをやっているんですよ。拘り的には無いんですけどね(笑)。

じゃあヴァイオリンを入れてしまおうとか。

そう！ヴァイオリンは是非欲しいですね！やってみたいです！(笑)ほんとに昔のブルジョアじゃないですけど、ヴァイオリンはいい楽器なんで使い方を間違えなければ取り入れてみたいですよね。まあ、曲は前のメンバーとかで作っていたんですけど、前の質問の難しかった事と言えば、ギターの的には“FEEL THE PAIN”のバックアップですね。

ボーナストラックの“SUNDAY I LOVE”はオチャラ





ケでやったと思うやけど、真剣にやっているんで笑ってしまいました。

(笑) いやあ、オチャラケでやっていても、真剣にやることを土台に敷かないと本当にオチャラケになってしまうんで、お金払った人に対して失礼になっちゃうから、そこら辺はやはり、買ってくれた人に「なにこれ」って言わせないように真剣にやりました。自転車を何台も壊したし(笑) 大変でした。あと、今回アメリカ人を連れてきてナレーションを入れてもらいました。

“SUNDAY I LOVE”も“FEEL THE PAIN”もそうなんですけど一役かってもらいました。まあ、ああいうところでアルバムの雰囲気が変わってくるんじゃないかなと思って入れました。

じゃあJIROさんはあのアルバムにはほぼ満足と。

そうですね！ギターに関してはやることは120%以上やってます！だからギターサウンドを聴いてほしいし、全体の楽曲を聴いてほしいし、特にカッコイイのはドラムかな。

田代のドラムねえ。

あれはもう、うん、うちのバンドで活かしてやるぜえ！という感じで(笑) やっぱり他と同じことをやってもその格好良さはみんなと同じ格好良さになっちゃうから違うところで変化をつけて活動したいなと、そういうへそ曲がりな根性でいってますんで(笑)。

どっちかいうたらライブバンドというよりスタジオバンド？

うーん、ライブバンドになりたいんですけども、どっちかといったらスタジオの作業の方が好きです(笑)。作曲が早いわけじゃないし、年中ギターを弾いているタイプじゃないんで、ラジオで流れてきたポップスの面白いフレーズがあったら、それを頭の中に覚えたい家でギターを持った時に弾いてみるぐらいです。今のドラムはなんでも叩けますんで、ポップスからジャズからやってくれと言ったらやってくれるんで、そこら辺で感謝してます(笑)。レコーディングは楽しくてたまりません。

なんかこういうたらなんやけど「器用貧乏の集団」！！(笑)という感じもするんやけど。

(笑) ハハハハハハ。「器用貧乏の集団」です(笑)。

そやからいろんな色を持っていると批評もあると思うんやけど、JAKEYはJAKEYやし、ギターはギターやし…。そう思ってくれたら嬉しいですね。ジョン・サイクスやんけ！と言われたら悲しいし。ジョン・サイクス+スラッシュメタル系。しかし、メロディアスだよ、てな感じで。

基本はスラッシュなんだ。

そうです！スラッシュ大好きです。EXODUSとかTESTAMENTとかOVER KILLとかDEATH ANGELとか。かと言ってスラッシュ系のバンドさんにはあまりお友達いないんですけど(笑) 心の中ではスラッシャーなんです(笑)。だから“FEEL THE PAIN”とかをよく聴いて貰うと、どこら辺のスラッシュが好きか、スラッシュが好きな人はニヤッとすると多いんじゃないかなと思います。

海外で影響を受けたミュージシャンは？

もうジョン・サイクス！(ちなみに日本人では元ブリザードのRANさんとの事だ：編者注)

今回もテープでカヴァーやっているよね。ライブでやるべきだわ。

まだ一回しかやってません。やはり、ライブでやるとカヴァーバンドと思われそうでつらいなと。

選曲渋いね。THIN LIZZYの“COLD SWEAT”とは。

ハハハ。実は次のカヴァー曲も某レコード店の店長さんには既にこれだと出されていますけど(笑) へへへ。

新宿のHやったりして。

ハハハ。実はその店長さんからBLACK SABBATHの“DIE YOUNG”をやってくれときます。あのロニー・ジェームス・ディオの頃のサバスをカヴァーしよう。と言ってる他のバンドさんやっちゃうかなあ(笑)。

ライブでは女性よりも野郎の方が多い？

そうですね、やはり男の方が多いですね。うちはルックス面が良くないんで(笑) ハハハハハハ。

そんなん言うたら他のメンバー怒りよってー。

いやいや、うちはルックスがいいんで是非女性の方に来て貰いたいです(笑)。

STONE EDGEのイメージって「ロッキン f」や「バンドやろうぜ」にも紹介されてると思えば「ボーイチャ」のペーパーにも載ってるし、この「カバラ」にも載ってる色々なイメージがあるんやけど…。

まあ、そこら辺はどうですかねえ。何もしないでライブハウスをただ回ってやって、ライブハウスに来た人しかみないというよりも、来日アーティストとか日本のビッグなバンドしか見たことない人に興味を持ってもらって、新しいお客さんをライブハウスに連れてくる役目の一つと言うか、自分等も見たいし、アンダーグラウンドで活動している良いバンドがもっといるんだぞ、というのを紹介したいし、革命といった大袈裟ですけど新しいお客さんを連れてこないしシーンには活性化しないんじゃないかと。だからメジャー誌にも連絡したり、ファンジンにもコンタクトを取っています。そういう風にやってるつもりなんですけど…。中にはライブハウスは初めてというお客さんからも連絡ありました。

最近海外の方でも独国の方でも…CDが販売されてたとか。

あつ、そうですね。あれも正直意味が分からなくて。いろんな人に聞くんですけどはっきりしたことが返ってこないんですが、ドイツの間に何回も当たっただけな…忘れました(笑)。とにかくうちのCDは売られているみたいです。倍のような値段で(笑)。誰かが支えてくれるのは嬉しいし、そういう人がいたらライブ20回位タダで見せてあげようかなあというぐらい嬉しいです。嫌がれるかもしれないけど(笑)。そのぐらい感謝してますね。

JIROちゃん自体タイガー・ドライパー・レコードを引っ提げて活動しているじゃないですか。そこら辺どうなの。

えーハッキリ言ってですね、その運営についてはストップ状態に近いものがあります。所属バンドはいっぱいあったんですけど、

相次ぐ解散と活動休止でしょ。それが

一つの理由で、もう一つがSTONE

EDGEが忙しかったという訳が

あって…。始めたきっかけというの

は、ライブハウスに出て動員が少な

いバンドほとんどで、「じゃあ一緒に

なって頑張っていこうよ」とバンドを

集めていったんですよ。で、集めるとき

にヘヴィメタル/スラッシュ系のバンド

募集して書いたら、デス/コア系のバン

ドも来ちゃって、来たバンドを拒まず入

れていったらこういうラインナップにな

っちゃったんですよ。STONE EDGEもその中

で大きくなるうと思っていたんですけど、

今はDUSTBINも解散しちゃったし、ACID

COLORも解散しちゃったし…。

今のレーベルに所属しているバンドは。

WHITE NOISEは頑張って活動しています

し、これから立て直す時に役かってもら

うかなと思っています。あとHOT MIX BRAIN

もガンガンライブやっていますし…。最近全然

連絡とってないんですよ(笑)。本当にダメ社長

で申し訳ない(笑)。いや、本当に一緒にやっていこうよというバンドは是非うちの方に連絡取ってください。お願いします。

年末にギターが一人抜けちゃったよね。今後のSTONE EDGEの活動は。

今のところ、4人でやっていきます。基礎固めでしょうか。もしかしたら将来的にはギターがキーボードを入れていきたいと思っています。我こそはという人はこれまたうちの方に連絡を...(笑)

できたらマルチ・プレイヤーがええけど。

そうですねえ。そりゃマルチが一番いいですけど、マルチを探すのは大変ですから。どこのバンドも一緒だと思いますが、ギター、ベースはある程度人材はいると思うのですが、ドラムが人材不足でしょうか。

確かGUARDIAN'S NAILの時もそうだったし、HIDDENも半年間不在やったもんねえ。

ああ、ZENITHもそうでしたし、LED STREAMもそうでしたね(笑)。あの時は争奪戦で、やはりドラムは少ないですね。ヘヴィメタル系のドラムって上手くなってくとフュージョンとかTOTOみたいに違うジャンルにいってしまいますからね...

最近また各バンドの脱退の話って多いですけど、それだけにバンドの運営はリーダーとして難しい?

バンドが進化していくためにはメンバーチェンジは仕方がないことだと思いますけど、できればずっと一緒にやっていくのが良いと思いますよね、うん。リーダー格ばかり集まっても一つのバンドは運営できないと思うし、皆が言いたいこと言って多分ダメだと思うし、今までの経験からいうと自分を含めてバンドの中にもう一人リーダー格がいれば、あとのメンバーはついてきてくれるというか、旨いくと思うんですけど。ただ全員がリーダー格じゃないバンドですと何にもやらずじまいで、ただそれで終わりだと思うですよ。だからリーダーとリーダー格がいてあとのメンバーを引っ張ってあげれば運営できるというのが、組織論かな。

営業もやり~ので社長業が忙しいんちゃう。こっちの将来は。

いやあ(笑)。ほんとと最近何にもやってなくて、ほんととごめんなさいって気持ちです。でも自分がSTONE EDGEを始めた頃は右も左も分からなくて、やっと色々な方とつき合えるようになったんで、今までに得たものを将来出せたらいいなと思いますけど。バンド活動って仕事と一緒にですから...

最近のバンドでJIROさんが後押ししたいバンド、サウンドプロデュースしたいバンドってある?

う~ん(しばし沈黙)。自分がしゃしゃりでもいいものかという気持ちの方が大きいんで、考えていません。だからどのバンドも出来ることな



ら自分達の力で上がっていったほしいし、でも一番やってもらいたいのは、上辺だけの仲良しじゃなくて、スクラム組んでみんなでいければいいなと思う。上辺だけの仲良しじゃなくてってことですかね。ライブ会場で会ったら「よう!」で終わりじゃなくて、連絡を取り合って上にいくためにはどうすればと考えていくのが大切なんじゃないかなと。

今年のSTONE EDGEの音源の予定は?

サード・ステージのCD「MAKE IT SHINE II」に2曲提供する予定です。それともう10カ月前に録った同じくサード・ステージのビデオ「MAKE IT SHINE II」1曲提供しているのがもうすぐ出るはずなんですけど。これはGUARDIAN'S NAILも入っているはずですよ。

ずばり今年の目標を教えてください。

なだけ早くCD売り切りたいし、本当に中身は良い作品だから音も良いし聴いてほしいです。CDのレーベルにも顔写真を印刷して金かけてます(笑)。なんたって最高のライナーが入っていますし(笑)。

グハハハハハ、ヒョエー!!! (笑)(ライナーは金田氏が書いてる: 編者注)

そういう面もあるし、値段も安いし。デモテープはもう十何本ぐらいしか残っていないし、もう作りませんので...(笑)。再発はしません。

さすがに営業してるやん(笑)。最後にファンに一言。

う~ん、見た目で判断しないで、とりえず音で判断してほしい。皆わかっていてと思うけど良いものはいいと、ジャンル関係なしで聴いてほしい。本心で動かされるようなシーンになってほしいと思いますよね。

その中の核となるよう頑張ってください。

はい、頑張ります。

今日はどうもありがとう。

後記: 意地悪な質問ばかりで恐縮しました。誤解があるかもしれないですが、「f ロッキン」誌にでているから色物バンドに見えるような発言を私はしているが、決して彼らはそういう事はない。結成は91年とまだ若い、最近ではガムテジメメジャー誌に紹介されているし、あのBEDLAMも「プレイヤー」誌でなんとインタビューが載っている。彼が言うようにいい物はいいわけで、先入観を持ちすぎるリスナーは本当に勿体ない。これから何かやってくれるだろう彼らに期待してペン置きたいと思う。JIRO氏にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

連絡先: STONE EDGE / TIGER DRIVER RECORDS
〒170 豊島区上池袋4-47-3リトレントビル・パート1 -301
タイガードライバーレコード
TEL 03-3916-1761



マニアのための STONE EDGE 完全カタログ

FOR SALE CD / TAPE

! IN DISGUISE/TD-001

記念すべきファーストCDシングル。"SHE CRIES"は"SHOW IT ALL"の原曲。"LIVE IN PEACE""ALL MY HEART"収録。Bは現BLASDEADの江成氏。音はEC的で今に比べてかなりラフだ。最近SOLD OUTになった模様。

(1992)

" FIGHT TO SURVIVE/TD-003

93年発表されたデモ。デモと言えないほど内容は濃くA-1から完成度は非常に高い。プログレ的な展開が洋楽ファンに受け入れられた。アキラ、江成はこの作品を残して脱退する。

(1993) 6TRX

GYPSY OF THE NIGHT/MSTD-001

今回はピアノをフューチャーしながらも、元POWER OF EMOTIONの田代をドラムに起用し、ギターサウンドを全開に出した初のフル・アルバム。息つく暇なギターが攻撃しかけてくる。VOのJACKEYもバワフルだ。

(1995) 8TRX

PROMOTION / PRESENT TAPE

\$ STONE EDGE LIVE/TD-002

CDシングル発売後の活動停止中にファン向けに配布されたライブテープでロックンf誌で無料配布された。怒涛の如くパワーメタルが収録されている。DrのDONはリズムが甘い、GとBはPOWER/THRASHしている。

(1992:NOT FOR SALE)8TRX

% THE COURT OF THE CRIMSON KING

"FIGHT TO SURVIVE"に付いていたプレゼントテープ。この商魂も驚くが選曲が凄い。JACKEYが若干フラットしているがこのアレンジは旨い。バンドの勢いが伝わってくる。

(1993:PRESENT TAPE)1TRX

& SHOW IT ALL/STONE EDGE

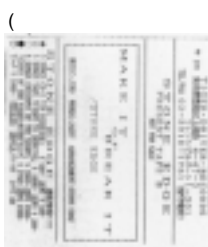
"FIGHT TO SURVIVE"発表後、勢い付くバンドは北陸ツアーを敢行。何とツアーに無料配布したテープだ。ファン泣かせのインデックス・カバーはご覧の通り4種類のイラストにこれ又4色あって全部集めると16本になる。全く何を考えているのだろう。このテープはラジオ編集用でもあり、あらゆる処に配布された。"SHOW IT ALL"は新録でイントロ部分はカットされている。

(1993:PROMOTION RADIO EDIT)1TRX

' COLD SWEAT/PRESENT TAPE II

THIN LIZZYのナンバーからSYKESフリークのJIROが選曲したのがこの曲。出来すぎていて。JACKEYのイコライズされた声が妙にはまっている。CD「GYPSY OF THE NIGHT」に付いてくるプレゼントテープだ。

(1995 PRESENT TAPE)1TRX



(MAKE IT OR BRAKE IT/STONE EDGE
昨年末大阪初上陸を記念してロケットで配布した限定80本のテープ。8トラで録ったもので少々音質は落ちるがMASATAKAとJIROの最後のギターが聴ける音源。この曲は新録で"MAKE IT SHINE II"に提供予定。"GYPSY OF..."タイプの作品だ。

(1995:PROMOTION TAPE)1TRX



) V.A./DEMO-9401:EXPLOSION WORKS EXP-231111

エクスブローションの10バンドが集まったサンプラーCD。エッジはオープニングに"SHOW IT ALL"で参加。これはイントロ付き。MASATAKAが加入している。

(1994:EXPLOSION)10TRX

OTHER TAPES



* METAL GODS SURVIVE/NOT FOR SALE
阪神大震災救済基金の為に企画されたプロジェクト。JUDUS PRIEST等全4曲HR/HMのカヴァーが収録。JIROはA-1"BREAKING THE LAW"でSOLOを弾いている。VOはCHURCH OF MISARYの朝枝だ。

(1995:NOT FOR SALE)4TRX



+ STOIC/STOIC

女性ヴォーカル有するストイックのデモ。JIROはB-3にゲストで参加している。80年代全盛時の良きジャパニーズ・HM・サウンド。Drは現ストーン・エッジの田代だ。

(1994)6TRX



, BLASDEAD

/EXTRA'95"TRY YOUR FAITH"

第一期ストーン・エッジの創設者江成が脱退後加入したブラステッドのサード。初期のエッジに通じるパワー・メタルが満載されている。

(1995)3TRX :BLASDEAD



- BUGEY'TRUMP/JUCK IN THE BOX

同じく"FIGHT TO SURVIVE"を発表して脱退したDsのアキラが加入したバギー・トランプのデモ。ハードであるがHMを期待するとはずれる。アメリカンな音だ。

(1995)3TRX

. "GYPSY OF THE NIGHT"
/PROMOTION TAPE

業界に配布した"GYPSY OF THE NIGHT"のプロモテープ。レコード店、業界誌、ファンジンは無論、海外にも配布された。CDと同じ内容。

その他“みかん記念日”“ママ&ワイフ”というデモにJIRO(KEY,G),JACKEY(BAC.VO),YOSHIO(B),田代(Drumsプログラム)で参加している作品もある。これはニューミュージック系の歌謡曲に彼らが参加したというアイテムだ。(1993)

またACID COLORのテープにもJIROとTOMMYがコーラスで参加している。

11月18日 目黒ライブステーション

「CAPITAL COMBAT ~ “TERROR SQUAD” 復活！」

TERROR SQUADの復活に合わせて#9を発行しようとしていた私は、この日の午前中もまだ編集作業に追われていた。午後になって慌ててコピーに奔走するが、ライブの時間は刻々と近づきばかりで、とりあえず30部だけ製本して目黒へと向かう。最初のバンドはGOATSだ。去る10月14日高円寺20000Vのライブにも行けなかった(運悪くKING CRIMSONと重なっていました)私は「最後の1曲でもいいから見させてくれい!」とばかりに走ったが、既にGOATSのステージが終わっていたばかりかCEMENTまで始まっているという。こればかりは私が悪いので何とも弁解のしようがないが、そういうわけで不完全なライブリポートになると思うが申し訳ない。

CEMENT

私が中に入ったときには既に2、3曲終えていたようだ。「これから中盤戦に入るぞ」というABE氏のMCの後に演奏されたのは2ndアルバムに収録されるであろう新曲であった。よりシンプルに、それでいてより鋭く研ぎ澄まされた新曲のサウンドは、この1年着実にライブ活動が続けてきたCEMENTというバンドの成長とも受け取れる。後半は1stアルバムより馴染みの曲を中心に披露した。

SAVAGE GREED

“Mane Of Antlion”で始まったSAVAGE GREEDのステージはデモの曲を中心にオムニバスに収録された“Ultimate Divide”を挟んで5曲が立て板に水の如くメドレー調に演奏された。ちなみにこれはメドレーとしてリ・アレンジされており、構成はデモとは異なる。近頃(ってもう1年位になるかもしれないが)SAVAGE GREEDはシークエンスとバンドの融合という課題に真っ正面から取り組んでおり、そういった意味ではこの日のライブは完璧に近い素晴らしいものであった。ラストに演奏されたのは5月にも披露された新曲で、どうやらこれは2曲がメドレーとなっているようである。後期SHELLSHOCKに近い複雑でテンションの高い、プログレチックな曲で個人的には非常に気に入っている。15分にも満たないステージだったが、短い時間に凝縮されたパッションはタダモノではない。

SILVER BACK

SILVER BACKを生で見るのは初めてであった。色々な意味でかなり期待して見ていたのだが、これがまた何とも言えず「ヘヴィメタル」であっ



た。この日のセットは新曲3曲に1stアルバムから“Insanity”そして最後に3rdデモより“Mental Disorder”という構成であり、この日集まったファンの殆どは見るとも聴くのも初めてであったろう事を考えると現在進行形のSILVER BACKを見せるのは正解だったと思う。演奏技術もさることながらヴォーカルの声がとてもマッチしていて、しかも上手い。ステージングに必要な以上の派手さはないものの緩急を考えた構成はさすがに年の功というべきか?!ペロペロに酔っていたGUARDIAN'S NAILのKYO氏をも絶賛させた、これぞヘヴィメタルと呼ぶに相応しいライブであった。お客さんはどう思ったか分からないけどね。

TERROR SQUAD

いよいよこの時が来た。「TERROR SQUAD 復活だ!! Song is called, Souls Of Obscurity! GO!!」という宇田川氏の絶叫と共に、檻から放たれた猛獣の如くもの凄いい勢いで演奏をスタートさせたTERROR SQUAD。この1年間、ろくにライブ活動が出来なくて悶々としていた彼らだけにこの日の爆発力は半端じゃなかった。スラッシュは死んじやいねえ!という魂の叫びのようにも感じられる。もうこんなスラッシュ馬鹿は世界中探したってなかなかいいやしない!とさえ思える位のバカさがげんは、あのプロレス馬鹿こと剛竜馬とタメをはる域に達していると言える。「この曲聴きたかった奴もいると思うけど...」といって演奏されたのは“Broken”。そうですよ、聴きたかったですよ、畜生!「Bang your HEAD!」こうなったらひたすら頭振ってやるとばかりに暴れていた私も彼らに劣らず大馬鹿者なのだが。全5曲、持ち曲は全て演奏した。何をもって「スラッシュ」と呼ぶかは人それぞれであると思うが、スピード・勢い・ギターメロディ・展開のどれをとっても国内最高峰に部類されると思う。地獄の果てまで彼らを追い続ける覚悟はできた。(文責:すぎ)



11.30 池袋CYBER

「ULTIMATE POWER METAL REVOLUTION ~ VOL.2 ~」

VOL.1の大成功からはや5カ月、究極メタル革命が帰ってきた。今回も決して広くはないICYBERが大方埋まっており少なくとも100人の動員には成功していると思う。HIDDENが急遽キャンセルになったのは残念だが、その穴は他の4バンドが埋めてくれるであろうと期待しつつ開演を待った。

VIGILANTE

この日のオープニングを務めたのはVOL.1にも登場したVIGILANTEであった。今「ヘヴィメタル系のバンドで何がいい?」って聞かれたら真っ先に「VIGILANTEだね」と応えてしまう位。好きなバンドなのだが、AETURNUS誌を読むような王道好きな人は是非彼らのライブに足を運んで欲しい。テクニカルでありながら必要以上にそこに走ることなく、むしろ初めに曲ありきの姿勢なので誰が聴いても凄さを感じると共にある種の耳に優しい印象を受けるはずである。2本のギターの絡みだけではなく、バンド全体の絡みが素晴らしい。しかしこの日のライブを以てドラマーの脱退が決定している事から今後が心配されるが、この日に限っては傍目からはかなり良かったと思う。ベースが抜けたりドラムが抜けたりと災難続きだが、それも自分達の信じる道を突き進む



ための必然であると割り切る彼らだけに、メンバーが安定した暁には今以上の活躍が期待される。怪物。

CRYSTAL CLEAR

武藤敬司のテーマ曲“Triumph”にのって登場したのは大阪のCRYSTAL CLEARだ。見るのも聴くのも初めてだったのだが、NWOBHMを思わせるヘヴィメタルとハードロックの中間のような楽曲であり、見ため的にも80年代のジャパメタチックで、いささか古風な印象を受けた。1曲目で演奏されたシンコペの曲はどことなくPRAING MANTISを思わせ、バンド的にはMAGNESIUM辺りと通ずるものがあるかもしれない。こういうのをやらせたら大阪のバンドはいかぬ力発揮する。1月に活動休止が決まっているだけに何とも言えないが、先端を突き進むバンドと同時にこういった伝統を受け継ぐ者達もシーンとしては必要不可欠な存在であると思う。

STONE EDGE

CDの1曲目でもある“Gypsy Of The Night”でスタートしたSTONE EDGEのライブはCDの曲を中心に“Show It All”まで全部で7曲が演奏された。ミキシングの関係か、もう少しギターが前面に出てもいいかなと思った。パワーメタルというよりはもう少しライトな感覚のサウンドだと思うが、そうした

ら い ぶ い ぼ ー と

中にも独特のアグレッシブ感があるSTONE EDGEのサウンドは一般ウケするサウンドでもあるという印象である。ヴォーカルが女性の為か激しさよりも華やかさを感じるステージであった。余談だが、ヴォーカルのJAKY 嬢は表情と角度によってはJWPのキャンディー奥津に似ていると思った(但しこれをお人言に言ったら真向から否定されてしまったが)。

さて、この日はHIDDENが登場するハズであったのだが、処々の事情によりこの日は出演できないとの事で、丹羽氏を除く4人がお詫びがてら来場し、ステージ上から挨拶を行った。この時点で何も知らない私は素直に「わざわざお詫びに来るなんて何て偉いんだ」と感心したものだ。丹羽氏が来れないのも学校が休めなかっただけだと思っていたので、その後大ドンドン返しを食らうことになるうとは露にも思っていなかった。

GUARDINA'S NAIL

SEが流れステージの幕が開くとそこには後ろ向きに一列に整列し逆光を浴びる彼らの姿が映し出され、それが何とも言えない恰好良さであった。“Passion Red”が勢い良く演奏されたあとにちょっとメロウでムーディーなバラード風ナンバー“Nightingle”が披露される。ツインリードとメロディのキャッチーさはこのバンドのウリでもあり、それがGUARDINA'S NAILらしさにもつながっているのだが、先に述べた2曲のような二面性を持っているのは強みであろう。大きなお世話だがもう少しヴォーカルに幅が出ればもっと楽曲が活きると思う。好き嫌いとはかくとしてキャッチーなパワーメタルである事は確かだ。

この企画は普段ライブハウスに足を運ばないファンの動員にも成功しているだけに地道に続けて行って欲しいです。JEFさん、お願いしますね。

(文責:すぎ)



12.17 川口MONSTER

5時50分頃到着した私だが、その時点でお客さんとおぼしき人達は0。しかもこの寒風吹き荒れる中あと30分近くも待たねばならないときている。参った。その後ばらばらとお客さんも来始めたが、最終的には約30人位か。厳しいやね。セット・チェンジの時には誰の趣味か、決まってCANNIBAL CORPSEの3rdが流れていて都合3回リビートしてました。3回目には正直「え～またぁ」と思っていました。

HELL SCREEN

最初に登場したのは活きのいい千葉の若手の一角HELL SCREEN。曲的にはシンプルな構成の部類に入り、普通のデスメタル寄りのグラインドといった感じだろうか。メロディックとは違うが、ある意味でのキャッチーさみたいなものを持ち合わせているかもしれない。しかしながらGの音がバリバリガリガリでちょっと聴きづらく、折角のハモリも活かしきれていなかったように思う。またアイデンティティが確立されていない部分も感じられ、ドラムの安定感(特にブラストで感じる)を含めて考慮の余地はあるように思った。今後に期待したい。

SUBCONSCIOUS TERROR

はるばる大阪からやってきた若手デスメタルバンド。今回が初めての関東/首都圏でのライブだそう。結成から約1年位だそうだが、なかなかどうして演奏は思ったよりもまとまっており、音的にも通りやすい切れのある音だった。サウンドはスラッシュからの流れをくむデスメタルといった感じで、ちょっと構成が複雑だから初めての人にはちょっととっつきにくいかも知れないが、メロディ的には馴染みやすいものを持っていると思う。曲が長めなので5曲でもお腹一杯。もう少し整理できるといいだろう。曲が終わる毎に軽い声で「サンキュー！」って言ったのが何故か印象的だった。そういやCEMENTの太一さんが浜崎さんの声を「いいデス声」だと気に入ってたが、確かにいいデス声である。

DEFILED

約2ヵ月に渡って行われた全国行脚の旅のラストをこのMONSTERで迎えるDEFILED。個人的にライブは初めてだったので楽しみにしていたのだが、CDの5曲目に収録の“Defeat Of Sanity”(多分...)でスタートした演奏はCDの5曲をMCを挟まずにグワァーとラストの

“Defiled”までとにかく圧巻の一言。音がCD以上に(演奏が雑という意味ではなくて)荒々しい感じが出ていて迫力がある。頭をぐるぐる回しながら轟音を奏でる(?)姿は無言の威圧感とも言うべきか。HELLCHILDがあっちにいった今となってはデスメタルシーンを束ねる核不在とも言えるが、DEFILEDがその最右翼にいるのは間違いない。欲を言えば観客を突き放すだけでなく、魅きつけて巻き込んでしまうようなあおりがあってもいいと思う。

GOATS

前々回(10.14)前回(11.18)と涙を飲んだだけに、個人的には待ちに待ったの感が強い。さすがに演奏は安定してるしとにかく曲が良い。CD効果か、頑張ってるファンも何人かいた。但しGの出音のバランスが悪く、野口さんの音が大き過ぎてか割れていてちょっと耳障りな感があったが、逆に小坂さんの音は良い感じが小さくて聴こえづかった。しかしそういった部分を抜きにしても見に来て良かった。でもまだまだGOATSはこんなもんじゃないと思う。一歩でも二歩でも飛躍して欲しい。“Behind The Truth”に始まって“Breathe”で終わる全6曲はもう少し見たいとも思ったが、腰8分目ってところでしょか。

MISCREANT INVOCATION

この日の企画の主催バンドである彼ら。ここはDEFILED、GOATSのアクに負けないトリとしての意地を見せて欲しい所だ。果たして負けなかったかと言われたら、疑問が残ると言わざるを得ない。まず前者の2バンドに比べて曲の浸透度、ひいてはバンドの浸透度の違い。これは正直大きいはず。また

新曲は高速2ビートを基調とした所謂ブラックメタル系の音への傾倒を思わせ、デモに収録されているようなスラッシュ的デスとは異なった方向に進もうとしているようである。そういった揺れる内部を反映してしまったのか、前回見た時よりも幾分ステージに元気がないようにも思えた。まだまだこれからにバンドなのでとにかく腰の座ったバンド活動を続けて欲しいものです。

(文責:すぎ)



12.26 横浜 7TH AVENUE

「EXTREME PUNISHMENT '95 SPECIAL」

この日の予定は6バンドだったが、HIDDENがVo脱退のためキャンセル、SUBCONSCIOUS TERRORも横浜へと向かう途中で大雪のためストップという、地方のゲスト2つがキャンセルとなったため、関東の4バンドで行われることになった。それにも増して、新宿LOFTではUNITEDのLIVEが行われており、残念なことに観客は少なかったが、今後の関東のシーンを左右しそうな可能性を持つ4バンドのLIVEは個人的には興味深いものであった。

DEATH FILE

最近のデス系のバンドの中では割と精力的な活動で波に乗りつつある千葉のDEATH FILEがこの日のトップバッターを務めた。以前見た時と比べて、ステージングなどはかなりまとまっており、LIVEを重ねただけの成果は発揮できていたと思う。ただ、最近ハードコア系との対バンが多かったせいなのか、何かぶっきらぼうな印象を受けたが、個人的にはそれが壁となってしまったのも事実。単に俺の気のせいだったらいいいけど...。演奏面などでは何の問題もなかったが、音のバランスが悪くて、曲の中での凝った部分がわかりづらく、ズバって印象しか残らなかったのは残念。ラストにはG&VoがGに専念して2曲ほど披露したが、多分カヴァーだろう。

OBLIVION

日本のスラッシュ系のバンドの中において、全員が女性という彼女達の存在は珍しいものである(世界中でもあんまりないと思うが)、かなり前に1stデモを聴いた時点では「まだまだのバンド」と思いつつも、かなり好感が持てる音だったと記憶している。LIVEを見るのは初めてで、2ndデモも未聴だが、約1年間のうちにかなり伸びたというのが第一印象である。曲が複雑な余りに時たまついていけなくなってる所や、ステージングなどにおいてはまだ課題を残す所だが、この辺はLIVEを重ねていけば解消されるであろう。とにかくこの方向性は悪くないので、更に磨きをかけて欲しいと思う。最後にDEATHのカヴァーを1曲披露(曲名忘れてしまったけど...スマン)。



TERROR SQUAD

11月18日を見逃したので、俺にとってはこれが復活後に初めて見るTERROR SQUADとなった。率直に感想を言わせて貰えば、とにかく凄かったの一言に尽きる。この日はこれだけでも見に来た甲斐があったというもの。活動停止前は多少のアラがあっても全体の勢いとパワーで一気に乗り切ってしまう面があったが、そうしている部分が完全に解消されている点は見事なものだった。音のバランスもかなり良く、TERROR SQUADの本領発揮といえる強力なステージを見せてくれた。新しいDsは前任者以上に強力に叩きまくっており、正に適任といった所だろうか。スラッシュらしいスラッシュというのは彼等の為にある言葉と言っても過言ではないだろう。あと、この日は急遽CASBAHの“Low Intensity Warfare”のカヴァーを披露。とにかくはまってました。

CEMENT

トリを務めたのはCEMENTである。CDを出してますます快調に飛ばしているが、その成果というか自信はこの日も感じられた。元~という肩書きを持つメンツ故に、演奏やステージングにおいてなんら問題をなく、トリとしての堂々とした風格すら漂わせている。スラッシュをベースとしながら、インダストリアルで激辛に味付けされた音は、正にCEMENTならではのスタイルとして成立しており、それはCDを聴けばわかると思うのだが、LIVEにおいてもそれは見事に証明されている。4月に予定されている2ndCDからの新曲も何曲か披露していたが、結構ハードコア寄りの直情的なインパクトで攻める曲で、LIVEにはもってこいといった感じ。アルバムでどう料理されるのが楽しみだ。スラッシュの枠の中で多様性を見せるCEMENTだが、4月予定の新作がどういった形で提示させる



のかを期待させるには十分な内容のステージであった。

様々なアクシデントがあって予定よりも出演バンドが減ったり、同じ日に大物と重なるなどと非常に厳しい状況ながらも、4バンドともかなり気合いの入ったステージでかなり濃かった。井上晴美の“さやえんどう”のCMではないが、個人的には凄く盛り上がりつつあるんだけど、実際は30人位っていうのは残念...。スラッシュ・シーン復興の原動力となって欲しいものだ。(文責:多田)

2.17 吉祥寺クレッシェンド

「KILL'EM ALL FAKIN' METALS GIG VOL.32」

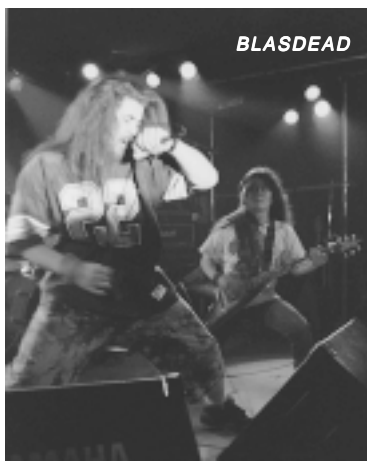
かなり前から、この企画の存在自体を知っていたが、実際に足を運んだのはこれで2回目である。こういった正統派HMを中心に推していくという確固たる信念をもって、定期的に企画GIGを続けていくという事は並大抵のことではない。その努力が実を結んだのか、この日は大雪だったにもかかわらず観客が多く、この企画が定着しつつある事を感じさせる雰囲気である。

AIMING HIGH

まずは申し訳ない...。時間を間違えて遅れてしまい、入った時には既に後半部へと突入したところだった。自分の見た部分のみで判断させてもらえば、ACCEPT以降のジャーマン・メタルの影響が強いバンドである。ステージングや演奏面での問題は特に目立たなかったし、とにかくこの手の音が好きでたまらないというのが、LIVEを通して伝わってくる内容で好感が持てる。あとはこのバンドならではの存在感が大きく出せるようになればよいと思う。今度はきちんと最初から見たいといけませんね。失礼しました...。

BLASDEAD

大幅なメンバーチェンジを経て、見事に復活をしたBLASDEAD。現メン



BLASDEAD

バーでの彼らを見るのはこれが初めてだが、音はもちろん、元気いっぱいのLIVEも前と変わらずといったところで、何だか嬉しくなっていました。この日は新曲も披露してくれたが、BLIND GUARDIANを思わせる曲調でマル。このメンバーでこのまま突き進んで欲しいものである。全く関係ないけど、ハーフのVo、顔と歌声は外人なのにMCはコテコテの日本人で何か妙だった。

HYDRA

関西の新兵器HYDRAの登場である。「DEMO III」における、最近のMEKONG DELTA 辺りを彷彿させるテクニカルなパワー・メタルにK.O.されたマニアも数多いと思うが、ライブでもその期待に見事応えてくれた。ただ、メンバーの動きが多少ぎこちなかったし、一体化したバックにVoの玉井氏がハマリ切れない部分も見受けられ、全体的にちょっと地味な

印象を受けた。Voはなかなかの実力派なんだし、数こなしてこなれば、もっと凄い存在になると思う。Voとバックが一体化した時の緊張感はかなりのものであった。再上京を強く望む!

VIGILANTE

新しいベースが加入して初めてのライブである。ちなみにDsはサポー

らいぶいぼーと



トだった（ゲストとして KEIZI の B 氏がコーラスを担当していた：編者注）。この日の VIGILANTE は何かまとまりに欠けており、不完全燃焼という印象が強く残った。新しいベースはなかなかの腕前で、バンドの今後を支えるには十分な力量を持っていて安心といったところだ。VIGILANTE の曲作りのセンスや腕前は、日本のバンドの中でもピカイチなだけに、一日も早く新 Ds を見つけてガンガンやって欲しい。チャンスが来れば、一気に飛躍出来るバンドなだけに、この日のライブはちょっと残念だった……。

MASTERMIND

この日のトリは MASTERMIND が務めた。初めて聴くバンドだが、なかなか人気のあるバンドのようで、かなりの盛り上がりを見せていた。様式美系の G × 2 を擁する 5 人組で、IMPERITTERRI をパワー・メタル寄りにした感じと言えばわかってもらえるだろうか。かなり LIVE 慣れたバンドなのだろう、MC や曲の選びがしっかりしており、最後まで飽きさせない点は見事であった。ここの G は両方とも上手いので、G ソロの部分は特に見応えがあった。様式美系好きには結構イケたと思いますよ。

5 バンドとも質が高く、充実した内容でした。こういったバンドや企画などが一丸となって、この冬の時代を乗りきって欲しいものである。大雪の中、来て良かったと思ただけでもよかった。LIVE は 10 時過ぎまで行なわれ、終電がやばくなったので慌てて帰った S.S.M でした。（文責：多田）

2.18 目黒ライブステーション

「ART OF FILTH Vol.1」



5 時 40 分頃に新宿の DISK HEAVEN で宇田川氏に会った。「今日行くんですか」なんて話をしていたら「びあに 5 時半からって書いてあった」というではないですか！前日のライブでも遅刻してしまった私は「うわあまた遅刻か？！」と焦り、買うもの買ってとっとと目黒へと向かったのだが、スタートが遅れていたようで余裕で間に合ってしまった。こんな心臓に悪い思いはあんまりしない方がいいです。ライブに行く前にはちゃんと時間を確認してから行きましょうね。

DEFILED

おっといきしな新曲か？CD に収録されていない曲をぶちかましてきた。ステージングは相変わらず頭グルグルと異常に血気迫るものがある。今日はちょっとだけ MC を挟んだが、短くボソッとつぶやくだけで、これもバンド全体のイメージにはまっていたよかった。こういう異常にシリアスなバンドが変にペラペラしゃべってしまうと何となく拍子抜けしてしまうものである。ステージ下手の G 氏の怒りとも苦しみともつかないもの凄いの形相はいかにもサウンドとマッチしている。ただ惜しむらくは音が轟音と化してしまっていて特にスネアが聞き取りづらかった為に本当にゴーストとなってしまった事が。まあ DEFILED らしいといえらしいけどね。T.SQUAD の宇田川氏がステージングを指して「めっちゃくちゃカッコイイ！！」と絶賛していたが、こういうバンドは大事にしたい。殺人的だ。

SIGH

ベースアンプ上に火燭を灯して雰囲気がいかにブラックっぽくなってきた。MIRAI 氏は黒装束という出で立ちであるがいつものメイクは無し。ちょっと残念である。CD を聴いてしまっているせいで、どうしてもあるべきもの（キーボード）がないような感じがしてしまう。Key のない SIGH のサウンドは SABBATICAL なブラック・メタルといった感じで、元々所謂一連の BLACK METAL と呼ばれるものとは違うわけで、なるほど確かにこれも SIGH の世界である。Dr も一打入魂のパワーヒッターでヘヴィさを強調している。CD で聴かれる荘厳で耽美な世界も良いが、シンプルかつヘヴィな SIGH もまた違った味わいがあるオツなものである。CD は CD、ライブはライブといった発想の転換がここでは要求される。CD の再現に拘ってはいけなないのだ。但しこの日演奏された曲の殆どは CD に収録されていない曲だったが。最後にはお約束の火吹きを披露してくれた。何故 BLACK

CHURCH OF MISARY

いよいよ遂にその全貌が明かされた CHURCH OF MISARY。チケットの売れ方をみてもこの日集まった 70 ~ 80 人くらいのファンの多くはこのバンドを見に来たと言っても過言ではないと思う。期待のこもった眼差しがステージ上に注がれる。サウンドは以前から三上氏が言っていた通りの重くどんよりとしたドゥーム、というかヘヴィロック。サブス直系と言ってもええそれまでだが、当然それだけでないのも事実。イメージ的には CATHEDRAL の 2nd とかを思い浮かべたのだが…これはあまり自信がない。国内で言えばやっぱり ETERNAL ELYSIUM 辺りが一番近い存在か。ヘヴィなのだが、音のうねりをもっと単純にロックしていき気持ちがいい。G と Dr は無名の新人とのことだが、演奏は非常に安定したまとまりのある音だったように思う。敢えて言えば元 M. INVOCATION の Vo 氏の中低域の声に、もう少し艶というか深みがあればなあと思う。それだけヴォーカルの比重が大きいと思うサウンドであり、つまりロックなのである。これは単なるノスタルジーの産物なのか、それとも今後の新たな展開に結びつくのか、期待が持たれる。少なくとも流行に踊らされるようなバンドではない。

この日 AGGRESSOR が大雪の為に午後 6 時の段階でまだ静岡であったという。勿論間に合えば出演する予定であったが、結局ライブが終了した 9 時の段階で今だ到着せずということで流れてしまった。残念。地方で頑張るスラッシュらしいスラッシュバンドとして楽しみにしていたのだが。残念という他ない。（文責：すぎ）



なにわめたる道

第参回 「上方お笑い大賞」ZOOMの巻

(文責：金田 興一郎 by HM/HR Laboratory)

明けましておめでとうございます。本年もよろしゅうお願いします。年末年始のテレビの番組は少し前なら上方芸能の古典的漫才が落語が中心やったが、ここ数年は紅白歌合戦が象徴するように世代の分散化が激しいのか、ほとんどがバラエティーと呼ばれるものがおおなってる。元旦の早朝より、B級タレントの尻まるだし、乳まるだしの光景は確かに慣らされたが、シロウトが金もろてパンツ見せる姿はさすがに笑えん。この国の秩序はほんまにないんちゃうかというぐらい情けない。笑い自体が非日常的モノクロームなのである。ハイパーバラエティーというんか知らんがどうも筆者にはお宅的強要な笑いなので立腹しようむないのやわ。見たその場から忘れる笑いは時間の無駄や。ほんまに。と、のっけからじいのため口から入ってしもたが、今回のねたも古い。あの円 広志が在籍していたブリティッシュ・ハード・ロックのズームの話やからである。1974年にズームは先述のヴォーカル、円 広志こと本名篠原義彦とギターの幸田 真人が中心になって結成。ベースに藤江 明仁、ドラムに中島 利光の布陣で関西のライブハウス、イベントを荒らすことになる。幸田のギブソンTVにマーシャル・アンプ、藤江のこれまたギブソンSGベースにハイワットのヘッドにマーシャル・スピーカーから繰り出す音は、当時としてはかなりのソリッドな重金属音を保有し、バッド・カンパニーのカヴァーか、はたまたバドカンの新曲かといわれるほどのオリジナルで、あっという間に関西アマチュア・ハード・ロックの頂点に立ち、たちまち大阪のTV番組にも毎週に登場するまでの人気バンドになる。というのも篠原のポール・ロジャースを師と仰ぐ歌唱力はヤマハ主催の8.8ロック・デイ全国大会でも入賞する力量を持っていた。全国に名前が広がっていくと、彼らもまた関西から全国に活動の範囲を広げていく。当時は関西といったらライブハウスは京都の拾得、択択、銀閣寺のサーカス・サーカス、大阪はキタのパーボン・ハウスにミナミのパハマぐらいい、最近のバンドが聞いたらうらやましが条件やった。30分か15分の休憩をはさみ、2ステージを一晩でこなすのが普通なのである。当然バンドの数が少ないのか、それともライブハウスの数が少ないのか、オーディションの厳しさは現在以上であったが合格すれば確実に日程をワンマンで確保できる環境やった。ライブハウスというより、ショーパブとゆうたほうがおうてるやろう。それだけ客動員が切れ始めると契約が切られるほんまに泥臭いバンドマンの世界やったが、ズームはただでさえソッポを向けられるハード・ロックに少ない持ち曲をカバーする為、なんと下ネタ中心という篠原の絶妙な漫才の語り調子でステージを構成するようになる。これが瞬間に人気を取ることにになり、楽曲は正統派だが、しゃべりになると客をステージにあげてコントまがいをするわ、どちらかゆうたらドリフターズ、ドンキールカルテットのようなコミック・バンドを売りに出していく。曲はというとき最後に英詞でバラードをしっかりと歌い上げるからこれまたこのギャップが客にとって不思議な魅力になった。女性ファンも全国に増え、山水館(現 ACTION のヨシローのバンドね。)を前座につれるようになってからは、早くもバンド自体プロデビューを意識してか、幸田と篠原は意識してか歌謡曲ともいえるキャッチーなポピュラー曲を書くようになる。解散の78年のラスト・ツアーにおいてはすべて盛況で、ズームはメジャーデビューを自他共に認められる、いや誰もがプロと認める風格がこの当時はあった。ついにレコーディングの為ズームは一時休止宣言。レコーディング終了の話が浮上するにつれ、バンドの不仲説も浮上する。皮肉にもこの79年の秋、第一回ヤマハポップコンで篠原が単独

で「夢想花」という曲でグランプリ。例の「飛んで飛んで回って回って」である。悲しいことにズーム後半のファンはロックファンよりも一般の歌謡曲支持者に受け入れられたため、当然バンドは分解。篠原は翌年、ヤマハの事務所から腰まであった髪を肩まで切り、減量に成功。円 広志と改名して全国茶の間に登場するのである。世界7カ国語で発表された超ビック・ヒット「夢想花」のB面は皮肉にもズーム時代の篠原の楽曲であり、これにより篠原は円として印税生活を実現できる大阪初のジャパニーズドリームを獲得するのである。氏はのちに森 昌子の「越冬つばめ」等の演歌までも手がけるようになり、いまだ昔の語り口調がのぞかせるしゃべりで関西のレギュラー番組を何本も持つタレントとして活躍しているのは有名。大手プロダクションに大事な彼女を奪い取られた感のあったその年、あまりにも変わり果てた篠原に失恋と同じ思いを感じたのはまだ若い思い出であり、残念ながらハード・ロックをこよなく愛するものにとっては彼がハード・ロックをやっていたと言いたくはないが、ハード・ロックだけに固執していたら、彼は今の人生をつかんでないだろう。当時の篠原、幸田が作る曲は今聴いても名曲であり、音楽である。彼らの当時の口癖は「箕面市でヒットチャートベスト10」であった。今の円の口癖は「自称ハード・ロッカー」である。

次回講義は70年代末期から80年代前半のジャパ・メタブームの狭間に戦死をとげたバンド群から、現代のバンド群とリンクさせながらその生き方を検証してみたいと思う。ほな、このへんで。

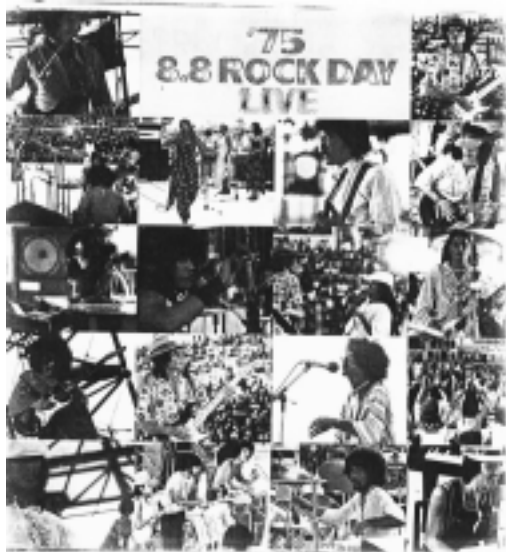
ZOOM / DICOGRAPHY

'75 8.8. ROCK DAY LIVE

Bourbon Record BMC-1001-2 (廃盤) 徳間音工

Rock Steady, Chance For Me, 2曲収録

このアルバムには他に沖縄の紫がゲストとして収録されている。ズーム名義での正規音源はこのアルバムのみである。



何故、今、地方なのか？

地方を拠点として活動しているバンドには、東名阪のバンドにはない「何か」を持っているというのが私の持論である。勿論これは私の勝手な考えだし、全てのバンドに当てはまる事ではないのは十分承知している。しかし今号でインタビューした札幌のSILVER BACKにしる、レビューした仙台のRABIDLY DOGSにしる、こういうバンド達の音を聞くにつけ「何かが違う」彼らに「もっとスポットライトが当たることがあっていいのではないか？」と考えるのはごく自然な事だと思う。だから「かばら」では僥越ながらもそういったバンド達に注目してこのような企画コーナーを作った次第であります。しかしながら実際に動き始めたからまだ日も浅く不勉強な部分も多いかとは思いますが、これからも続けていくつもりですのでよろしくお願い致しますという事で、今回は第1回目として長野編をお届けします。

長野のバンドと言えば、CD効果がやっぱり真っ先に思い浮かぶのは大砲でしょう。またストレートなグランドを聴かせるGODS OF GRINDと、UNHOLY GRAVEのようなちょっぴり妖しいグランドを聴かせるPULVERIZERの2つは「よくこども」なんかに載っていたので知っている人もいるかと思いますが、という事でこの3つのバンドの簡単な略歴を紹介すると...

大砲

今から約2年半前(93年の秋頃か?)に結成。地元のライブハウスを中心に活動する。94年に1st DEMOとなる「豚足」を発表。DEMOの発表を機に東京にも進出する。95年には2nd DEMO「DULL PROFIT FOR」を発表。95年12月にはフルレングスCD「大仏魂(だいぶつこん)」をリリース。メンバーは中澤由美子(Dr)、駒沢重典(メインVo&G)、松沢大成(「ともなり」と読む)(B&Vo)の3人。今長野で一番勢いのあるバンドである。

GODS OF GRIND

GODS OF GRINDは春原信一(Dr)宮林卓見(G&Vo)轟秀夫(B)の3人で、95年に1st DEMOを完成させた。GRIND、DEATHを基本にオリジナリティーのあるストレートな曲を追及している。今後の活動は東京や大阪、名古屋など大都市を中心に地方ツアーを予定している。対バンを募集中です。どこにでも行くのでお願いします。

PULVERIZER

94年10月結成。翌11月にLIVE活動もスタート。その後メンバーチェンジを経て玉井(Vo)宮林(G)吉野(G)下島(B)春原(Dr)となり、95年9月に1st DEMOを録る。地元長野を中心に活動してきたが、96年からは主要都市や他の地方においても積極的に活動していく予定。

...とまあ現在私が知っているのはこれ位なのですが、まだまだ長野にはバンドがたくさんあるようです。例えば松本の自称「グランジ・コア」のJUNKは若年17才の非常に若いバンドなのだが、グランジを激しくしたかのようなサウンドでじわじわとファンを増やしているという。JUNKは東京にも時々来ており、デモテープ「JUNK」は4曲入り¥500で666レコードより好評発売中とか。また同じく松本のバンドで女性だけのメンバーで結成された弁天小僧は今風のハードコアなサウンドにラップ・ヴォーカルが乗ったような、ヌンチャク・タイプのバンドだそう。これもメンバーが18才と若い。こうしてみると長野はハードコアやグランドなバンドばかりな印象を受けるがどうも、松本にはPROJECTというパワーメタル・バンドもいるそう。これまた17才という若さで、デモはまだないそうだがどんなパワーメタルを聴かせてくれるのか楽しみな存在である。

長野は松本のライブハウス「音屋敷」と大砲の「666レコード」を中心に若いパワーがみなぎっている。これがただ単に頭数が多いだけなのか、それとも実力派が集うヘヴィ・ミュージックの都なのかは上に挙げたバンド達の頑張り次第だと思う。いやぁ長野にこんなにバンドがいたなんて正直知りませんでした。みんな頑張ってください。

次回は東北編を予定しております。ではまた。

c/o 中澤 由美子 / 大砲OFFICE (666 RECORDS)
〒390 長野県松本市横田4-10-32
TEL 0263-34-0457



大砲 DULL PROFIT FOR

c/o 〒390 松本市渚2-7-33
(音屋敷) 大砲 0263-28-7827



大砲 大仏魂

666 RECORDS
品番666-0001



GODS OF GRIND VOL.1

c/o 〒381 長野県長野市若宮
1-6-2 春原 信一

マイペースで活動をしている長野は松本の超重量級トリオのデモ。以前はデス声の専任Voがライブではけっこう笑いをとっていたが、トリオになってからは本格的にPANTERAタイプの音を追及している。珍しくリーダーが女性でドラムなのだが、侮ってはいけない、このドラムのスネアのヒットから、タム、シンバルの切り方まで非常にライブでは安定していてセンスが抜群なのである。ゴルフと一緒に力だけじゃないのである。このドラムは男だろうが、女だろうが実に上手い。逆に大砲のやりたい音楽では器が小さすぎるのではないか。あまりにも勿体ないような気がする。地元長野ではTVなど積極的に活動しているようだが、もっとスケールを感じさせる大作に進化させたらどうか。鍵は楽曲にあると思う。しかし、なんでこんな美人がこんな連中(失礼!)とやっとなんや。音源は最近発売されたCD「大仏魂」をお勧めする。5曲入り(金田)

というわけで金田氏がお勧めする「大仏魂」を紹介しよう。このアルバムはアルバムタイトルの読み方がEAT誌によって話題となりましたが、どうなんですかね。んな事はどうでもいいとして、この大砲はデス声に近いVoと今風のヘヴィなサウンドを基調としたスラッシュの影響を思わせるようなハードコア・サウンドが上手く絡み合っている大砲というバンドの音に染み上げてるとい印象を受けます。しかし息苦しいまでの重さはなく聴きやすいと思います。総体的にもう少し曲に幅を持たせてみるのも面白いと思いますがいかがでしょうか?Drは言わなければならない女性だなんて思わないでしょう。アルバムとしてはややコンパクトにまとまってしまうかなとも思うが、爽快であることには間違いない。14曲入り。¥2500。(すぎ)

長野のバンドである。正直それだけでも興味をそそられるのだが、イントロの何とも形容し難い変な雰囲気益々興味をそそるなんて思ったら一気呵成のグランドコアである。短い中にも展開が考えられていて単調にならない工夫がなされているので、ある種の聴きやすさをおぼえる。音もそんなに悪くないし、この手としては楽しめる部類だと思う。プラストが叩ききれていないのはご愛敬として、こういう音形態はどかがやって一緒に言われないだけの個性が必要だとも思うのだが、このデモだけでそこまでの+を見つかるまでに至らなかったのは残念。しかしライブがある。ライブでバカハツしてくればこれは結構イケるかもという期待は抱ける。5曲入り。¥300。(すぎ)

地方音勢台鋼鉄

第1回 長野編

(文責: すぎ)

たわいもないはなし

相変わらずのプロレスネタでございます

1月10日 FMW 千葉公園体育館

この日は学校で実験だった。時計とにらめっこしつつ、何とか6時に実験を終わらせて急いで会場へと走った。そう、千葉公園は歩いて15分くらいと非常に行きやすい会場なのである。この日の目玉はメインの有刺鉄線スパイダーネットデスマッチであるが、女子の豊田vsアジャ、工藤vs長与も見逃せない。コンバット豊田vsアジャは元極悪同盟同志の対戦であり(懐かしい...こんな見方してる方が珍しいよね)お互いの巨体を活かした体と体がぶつかりあう好勝負だったのに対して工藤vs長与は思ってたよりもあっさりした内容だったのでに加えて試合後の騒動の方が目立ってしまい余韻が残りにくかったのも少し残念だった。メインはW INGファンが紙吹雪をとばす大盛りあがりを見せたが、プロモーターに試合後掃除するようにと怒られていました(笑)。勿論ちゃんと片付けたいでした。

2月5日 IWA 千葉公園体育館

久しぶりにIWAを見に行った。当日すれ違った宣伝カーがターザン後藤を大々的に宣伝している事実は正直悲しかった。レザーもヘッドハンターズもない日本人だけの興行。そこに何とも言えない寂しさを感じるのには私だけなのか。セミの中牧vs雁之助は微妙な裁定も有って今イチ盛り上がり欠ける。さてメインは金髪狼こと上田馬之助vsターザン後藤だ。この試合ではNOWのAGAマッチの時のように馬之助が包丁を持ってくるのではないかと期待が大きかったが、最初に登場した時点ではいつものように竹刀を持ってきただけでちょっと期待外れ。でも後藤の椅子に一蹴され控室に戻った上田は遂に禁断の凶器を手に戻ってきた。グサリと机を貫く刃包丁はさすがに戦慄もた。最後は千葉公園体育館特有の低い二階席と両者の手首に繋がれたチェーン(チェーンデスマッチだったの)を利用しての絞首刑で後藤がレフェリーストップ勝ちを収めた。その後の上田の狂乱ぶりは凄かったが、気のせいかな上田は酒臭かった。もしかしたら飲んできたと怖くて狂えないのかも思えないと思う...

3月6日 全女・山武町中央体育館

同じ千葉でも千葉駅より先では全く異なった風景が広がる。佐倉から分岐し総武本線を下る。佐倉から4つ目の日向に到着したのは丁度5時だった。駅を降りてビックリした。何もなかった。ちょっと歩を進めれば商店街にでるのだが、あれには驚いた。同じ千葉でもこうも違うのである。広くはない県道、水田と山林に囲まれた風景はちょっと懐かしさを感じる。実は1年だけオリエンテリング部に在籍してたことがある私はそんな山林の中を走っていた経験がある。但し花粉症に悩まされている私にとってそんな山林はちょっと疎ましくもある。とにかく歩く。歩くこと約25分、開けた畑の向こ

うに体育館があった。何故普段あまり行かない全女の地方興行にきたのか。それは引退が決まっている長谷川咲恵を最後に一度、地方の何の変哲もない興行で観ておきたかったからだ。それなのにガーン! 何とこの日長谷川はいなかった。理由は知らないが、とにかくいないのだ。しかも長谷川の次に楽しみにしていた一番若手の納見と最上も試合が組まれていなかった。京子と玉田は怪我で欠場中。じゃあ行って損したかと言えばそれはない。なんら特別なことはなかったし、そこにあったのはいつもの全女の風景だったけれど、それはそれでまた味わいを感じてしまう。とにかく私は好きなのだ。印象に残ったのはアジャの人氣ぶり。TVの影響はかくも大きいのかと改めて思い知らされた次第だ。とにかくアジャが出てきて沸き、技をかけて沸き、それこそアジャの一挙手一投足で沸くのだ。これだけは現WWWA王者の豊田真奈美が逆立ちしてもかなわないだろう。こうして何事もなかった会場を後にして暗い夜道をてくてく歩き日向駅に到着する。9時半だったが、日向駅は無人駅と化していた。ビックリ。3月23日 JWP 笠間市民体育館

茨城の笠間へと向かった。常磐線乗り換えのため松戸で一旦下車したら駅前の露店で金平糖の量り売りをしていたので思わず100gも買ってしまった。300円也。勝田行きの電車に乗る。いがいと混んでいたのだがなんとか席を確保することが出来たが、トイレの向かいの席だった。別にそれ自体はどうという事もないのだが、面白いことに総武線に比べてトイレの回転率がよいのである。傑作だったのは低学年位の男の子が、幼稚園位の子とそのお母さんが入っているを知らずに扉を開けてしまい慌てて閉めたその子は何となく私と目線が合ってしまった。「アキになってるからさあ...」とまるで私に弁明するかのようにつぶやいたのだった。この場合鍵をかけなかったお母さんが悪いのだが、男の子は非常にバツの悪い思いをしたことだろう。あと面白かったのは小さな男の子と女の子の兄弟が代わる代わる入ったのだが、出てきた男の子が入ろうとした女の子に「一緒に入ってあげようか?」と聞いていた事。勿論女の子はやりわりと断っていたが笑えた。土浦辺りを過ると茨城色が濃くなる。特におばあちゃん。「だっべ」という茨城訛りを聞く。「ああ茨城に来たなあ」という感慨が沸き起こる。話は変わるが土浦の4つ先に羽鳥という駅があったりする。友部で乗り換え。何となく「旅は駅弁」と駅弁を探すのが売っていない。そうこうしているうちに電車が来てしまい慌てて飛び乗る。気がついたときには遅かった。それは反対方向であった。かくして水戸にきてしまった私は仕方がないので駅弁を探す。「水戸で駅弁だったら黄門弁当なんなのがあったりして」とか思っていたら本当にあったのでつい買ってしまふ。700円也。ごく普通の幕の内だが、敢えて言えばシソの梅酒漬けがらしいといえらしか。でもあまり美味しくなかった。車窓から見る偕楽園の梅は名所だけにさすがに綺麗だった。再び友部に到着、今度は間違えずに乗り換える。友部から2駅で笠間に到着。ホームからは筑波山が見える。事前に地図で確認があった通りてくてく歩くが、30分くらい歩いててもどうもポイントの交差点がない。「おかしい」と思ったと

きには手遅れ、行き過ぎていた。そんなこんなで本当に開演ギリギリであった。ポリショイを指して小さな女の子がババに「ビエロだビエロだ」と嬉しそうにしているのがなんとも微笑ましかった。試合観戦後今度は間違わずに駅に着いた。友部に来ると、常磐線が人身事故のために30分遅れているという。仕方がない。駅構内の立ち食いそば屋で納豆そばを食す。とことん茨城にこだわってみた。かけそばにバックの納豆をガバツとかけただけの豪快な一品だが悪くはなかった。結局友部では電車を45分くらい待った。疲れた。

この#10の発行が遅れて一番損をしたのはこのページかもしれない。実はあの2月25日FMW後楽園大会におけるフェルトリコ軍団の乱入劇は既に昨年未にはファンの間でまことしやかな噂として流れていたのだ。キニョネスと庄司社長は仲が悪いからキニョネスがIWAを去るのは時間の問題だ、とか、その時にはヘッドハンターズを連れてIWAを出ていく、とか、FMWの人間とハンターズが会って話をしたとか、といった類の話がかなり信憑性の高いものとしてマニアの会話に上っていた。最近IWAから足が遠のいていた私だが、これで更に足は遠のくだろう。逆にFMWが俄然面白くなってきた。松永がいて金村がいてレザーにジェysonがいて、更にボーゴにヘッドハンターズに中牧が集うリング、これをW INGと呼ばずに何と呼ぼう! これはW INGのリバイバルではない。新たな戦争である。その証拠にW ING軍のファンとフェルトリコ軍のファンは相容れないものらしい。私みたいにどっちも歓迎して喜んでいるファンは以外にも少ないように思える。これでリングのシートがあのエンジ色のシートなら言うことないんだけどなあ。金村だったか松永だったか忘れたけど「W ING同士であたった時が一番W INGらしい試合になる」というような発言をしているが、同意。これからのFMWのリングで何が起きるのか、とても楽しみである。5.5川崎球場は必見だ。

あの荒谷が天龍と組んで新日のリングに上がった。感慨深いものがある。頑張れ荒谷。

新日3月シリーズに参加したヒュー・モラストのC・ザ・ターミネーターなんだね。

新日4.29東京ドームで長谷川vsターザン後藤というのは本当なのだろうか。隠し玉ダン・スパーンを新日にとられたIWAよ、どうする?

FMW5.5川崎球場のXはキム・ドクだと思っていたのだが、テリーファンクだという仰天情報もあり。マジ?

JWP4月7日横浜文化体育館大会で菅生裕美が引退する。遂にこの時が来てしまったか、との感もある菅生だが、印象に残る試合として94年11月6日後楽園のvs外山戦と94年12月4日後楽園での関西&菅生vsデビル&矢樹の一戦を挙げたい。引退後のレフェリーとしての第二の人生も頑張ってもらいたい。

やっぱりCOOGAの正体は神谷美織だった。ポリショイの正体だけは未だに不明。でもその方がいい。素顔はカワイイらしいです。

長谷川咲恵の引退セレモニーは目頭が熱くなる思いだった。曰く「女子プロに溺愛された女」は最後まで明るくマツトを去っていった。

(4月6日執筆/文責:すぎ)

中央でベルトを掲げているのは、かつて全日本で活躍していたあの“人間魚雷”ことテリー・ゴディである。そしてその脇を固める2人はヘッドバンガーズという米国のローカル団体に参戦しているレスラーである。今は亡きSMWでのヒトコマであるが、このヘッドバンガーズ、向かって右が「モッシュ」といい、左が「スラッシャー」というそう。写真ではちょっと見づらくてよく分からないと思うが、そのスラッシャーさんはBENEDICTIONのTシャツを着ているのだ。ただそれだけなんだけど、これだけコテコテなのもマット界広しと言えどもなかなかないもんなんだ、つい載せてしまいました。着てるだけだったら、かつてWWWA世界チャンピオンだった頃のブル様こと全女のブル中野はMEGADETHのTシャツをよく着てたけど。あとテーマ曲だったらここで書ききれない位メタル系のバンドの曲が使われているけど、ちょっと古いけど昔同じく全女の堀田祐美子はTERRA ROSAの“Carry It Out”を使っていました。なかなか趣があっていいですね。



バックナンバーについて

現在在庫があるのは以下の物のみです。

- # 6 (95.1) CASBAH / MULTIPLEX インタビュー (32P) ¥150...残り2部
 - # 8 (95.8) ヌンチャク / 千葉 DIE 政己インタビュー (32P) ¥150...残り5部
 - # 9 (95.11) HIDDEN / TERROR SQUAD / HALF LIFE (32P) ¥150...残り8部
- 残り部数は4月17日現在のものです。#1~#5、#7は完売御礼再発はしません。バックナンバーを希望する方はその号の金額に送料として190円分の切手を同封してお送り下さい(2冊以上の場合は270円切手の方が安心)。宜しくお願いします。一応忠告しておきますが、かばらは昔のになればなる程「ちゃっちく」になっていきますので、とりあえず念のため。もしも既に無くなってしまっていたら御免なさいね。

戯言たわごと



やっと#10を発行できる運びとなりましたことを感謝いたします。結局2カ月遅れとなってしまう、内容的にももう少し早く出せればちょっとはタイムリーだったたのではないかと残念に思っています。私は睡眠魔なので、どんなに時間がなくてもとりあえず睡眠だけは必ずとる。だから完徹した後とかは決まって10数時間寝てしまう。だから人より時間の使い方が下手かもしれない。どうしようもないけどまいったね。面倒臭いことは後回しにしてしまうので電話とか手紙とか滞りがち

になってしまうけど、あんまり気にしないでください。多分大丈夫です(何が?) 週刊宝石の2月15日号かな? 持っている人は連絡下さい。お願いします。かばらは「辛口武闘派」なのでしょうか? 読者からの審判を仰ぎたいです。気にしてないけど...って全然気にしてるよね(笑)。関係者はともかく普通の読者がどう思っているかが知りたい。ハッキリいってライブに行く回数よりもプロレス見に行く回数の方が断然多い。それはすなわち「見たい」と思わせてくれるライブが減ったということなのか、はたまた単に私がプロレス馬鹿なだけなのか。EATのHIDEさんも言ってたけど、デモだろうとプロモであろうと音源には最低限連絡先を明記して欲しい。何の為にだしてるんだろね。これからは地方の時代だ! 次号もよろしくをお願いします。

次号 # 11 予告

次号のインタビューもやっぱりバンド側への打診を済ませていない状況なのではっきりとバンド名をお知らせする事は出来ませんが、ブラックなバンドとヘヴィメタルなバンドとインデストリアルなバンドを考えています。あくまで構想段階なのでもし変更になっても怒らないでね。次号は6月28日発売です。今回前号で発行日を指定しといて2カ月近くも大幅に遅れてしまった事実を差し置いてこの暴挙。3ヶ月周期の季刊誌にしたいという夢はまだ捨てたわけではありませんので、とりあえず6月28日ということにしておきます。次は今回よりもうちょっと自信がありますので、もし遅れても1カ月以内で収まるでしょう、って最初から逃げ道つくっちゃったりて、いや次も頑張りますんで。

前回から私が発行したもの全てにハンコを押しています。実はこれちょっと気に入って2月の終わりには既にハンコを買っちゃったりしてノリノリです。「5枚集めて素敵なプレゼント」はちょっと真剣に検討しています。ただあと少なくとも2回は出さないと5枚集まらないので、まああと2回出したら公表しますね。

検印

この検印が無き物かばらと認めず



KABBALA #10 1996.Apl

Article	祝復活！ RAGING FURY	2-3
	特別寄稿・今年はこうなる	3
Interview	SILVER BACK	4-7
Article	Check This Bands・HYDRA	8
Interview	GOATS	9-12
News	ちょっとだけにゅーす	13-14
Review	26 Reviews(Rabidly Dogs, Argus, Cement etc...),....	15-18
Interview	STONE EDGE	19-23
Live Report	11/18 目黒 & 11/30 池袋 & 12/17 川口	24-25
	12/26 横浜 & 2/17 吉祥寺 & 2/18 目黒	26-27
Article	なにわめたる道～ZOOMの巻	28
	地方音熱今鋼鉄～長野編	29
	たわいもない話	30
	無断転載して遊ぼう	31

情報・投稿なんでも待っています

感想・意見・批判 etc なんでも結構
連絡はこちらへ

KABBALA を売っているのは

DISK UNION の各店 (東京近県)

DISK HEAVEN (新宿・名古屋・大阪)

POISON CHILD'zine の児玉さん (名古屋)

郵送の場合には送料として190円切手を
同封の上、郵送特価150円分の切手を合
わせて上記の住所に送ってください。

ありがとうTHANKS LIST 金田興一郎さん、多田

SxSxM 進さん、
SILVER BACK の田中清久さん、
STONE EDGE のJIROさん、GOATS の皆様
テープを送ってくれたバンドの皆様
情報を提供してくださった皆様
買ってくれた皆様

KABBALA #10

編集・発行 杉浦 康司

第1刷 平成8年4月18日発行

(発行部数200部)

定価

200yen